

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.146

2005年7月

第46回名大祭「道草」が開催される



<http://www.nagoya-u.ac.jp/>

目次

●ニュース	
第46回名大祭「道草」が開催される	2
平成17年度第1回経営協議会を東山キャンパスで開催	4
平野総長が「名大の歴史をたどる」(全学教養科目)で講義	5
山本副総長が世界学長会議に参加	5
岡本佳男名誉教授が藤原賞を受賞	6
平野総長が日豪高等教育ラウンドテーブルに出席	6
総長裁量経費(研究奨励費)成果報告会を開催	7
杉浦理事と豊田理事が附属農場を視察	7
今年度の春季新入留学生歓迎懇談会を開催	8
教養教育実施組織会議・事務協議会を開催	8
国立大学法人等職員採用試験受験者に対する説明会を開催	9
キャンパスグリーンウィーク実施	9
東海・北陸地区国立学校等総務部課長会議を開催	9
●知の先端	
シアノバクテリアの一日 近藤 孝男(大学院理学研究科教授)	10
●知の未来へー若手研究者の紹介	
学び合うことの意義の探究ー授業におけるコミュニケーションの分析ー	12
柴田 好章(大学院教育発達科学研究科助教授)	
●同窓生から	
日本のNGO職員から見たイラク復興支援事業	13
豊岡 正道(ピースウィンズ・ジャパンプログラム・コーディネーター/イラク事業現地責任者)	
●教育のデザインとプラクティス	
低年次生の学習意欲を高める大学論をめざす	14
近田 政博(高等教育研究センター助教授)	
●学生の元気	
人間の特権:芸術交流企画で見えてきた自分	16
浅香 ゆき(法学部法律・政治学科4年)	
●職員から	
学内の情報技術に思う	17
安藤 孝彦(全学技術センター共通基盤技術支援室情報通信技術系課長)	
●地域にひらく	
名古屋大学協会の設立ー産学官連携のさらなる発展を目指してー	18
太田 美智男(総長補佐[産学官連携担当]/大学院医学系研究科教授)	
●部局ニュース	
愛知万博を記念した連続国際フォーラム・シンポジウム開催	20
若手教員の人材相互交流に3大学が合意	21
東芝との研究インターンシップ説明会開催	21
農業教育公園・農業ふれあい教室(第1回・第2回)開催	22
今年度の国際言語文化研究科公開講座始まる	22
宇宙天気研究に関する4者連携協定キックオフミーティング開催	23
太陽地球環境研究所が一般公開と講演会を実施	23
シンポジウム「沖縄亜熱帯域の水循環の観測研究」開催	24
第6回エコツアー開催	24
大学連携キャンパス講座「おもしろ博物学」開催	25
博物館第40回特別講演会開催	26
ICCAE2005年度第1回オープンセミナー開催	26
●名大を表敬訪問された方々 平成17年4月1日～6月15日	27
●受賞者一覧	29
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成17年5月16日～6月15日	31
●INFORMATION	
平成17年度名古屋大学公開講座	34
●イベントカレンダー	36
●ちょっと名大史	
名大初の女性博士	40

第46回名大祭「道草」が開催される





第46回名大祭が、6月2日（木）午後から5日（日）まで、「道草」をテーマに開催されました。今年のテーマである「道草」には、いつも目標に向かって頑張っている人たちがちょっとした息抜きにふらっと立ち寄ることができる身近で温かい大学祭になるようにとの思いが込められています。

毎年恒例のプレ企画である仮装行列は、昨年は雨天中止となってしまいましたが、今年は天候にも恵まれ、「仮装行列2005～ぶらぶら名大 Walker～」と題して、5月15日（日）に行われ、多くの名大生が白川公園を起点に、栄を練り歩き、名大祭をアピールしました。また、5月27日（金）から28日（土）にかけて、名古屋スポーツセンターで実施された「徹夜でスケート＊2005」には、多数の学生が参加し、名大祭本番に向けての雰囲気を盛り上げました。

今年は、初日以外は概ね天候にも恵まれ、延べ5万人近くの来場者が約100もの企画のある名大祭を楽しみました。

期間中は、演劇・合唱・伝統芸能・絵画等の学内の部活、サークルの発表が多く行われたほか、研究公開、学術講演等も実施され、本学の教育研究

活動の一端をわかりやすく紹介していました。豊田講堂前特設ステージでは、第29回グリーンフェスティバルをはじめ、数多くのバンドライブ等が行われ、多くの聴衆が一体となって名大祭を満喫し、また、豊田講堂ホールでは、最終日にお笑い企画「DEAD OWALIVE」が行われ、会場は笑いに包まれていました。

さらに、第2グリーンベルトの東側エリアでは、新しい企画として、縁日・提灯・竹林をイメージした「夏祭～NATSU MATSURI～」が行われ、憩いと安らぎの場を提供しました。また、模擬店ストリートには約120店、フリーマーケットには約80店の出店があり、大変な賑わいをみせていました。

	2	3
1		4

- 1 後夜祭
「盛夜祭～新たなるミチへ～」
- 2 模擬店ストリート
- 3 夏祭～NATSU MATSURI～
- 4 豊田講堂前特設ステージでの
バンドライブ



平成17年度第1回経営協議会を東山キャンパスで開催



経営協議会の様子

平成17年度第1回経営協議会が、6月12日（日）、豊田講堂第1会議室において開催されました。なお、本学では「クールビズ」を励行しており、平野総長の呼びかけで上着を脱いでの会議となりました。

会議では、最初に、平野総長の本学をめぐる動向についての報告を含んだあいさつの後、新任理事の紹介があり、次いで、各担当理事から、①平成16年度決算、②平成16年事業年度に係る業務の実績に関する報告書、③平成18年度概算要求の各議題についての説明が行われました。

それぞれの説明に対して、委員から、剰余金、産学連携、環境問題、男女共同参画、競争的資金等に関する質問があり、意見交換の結果、各議題とも提案どおり了承されまし

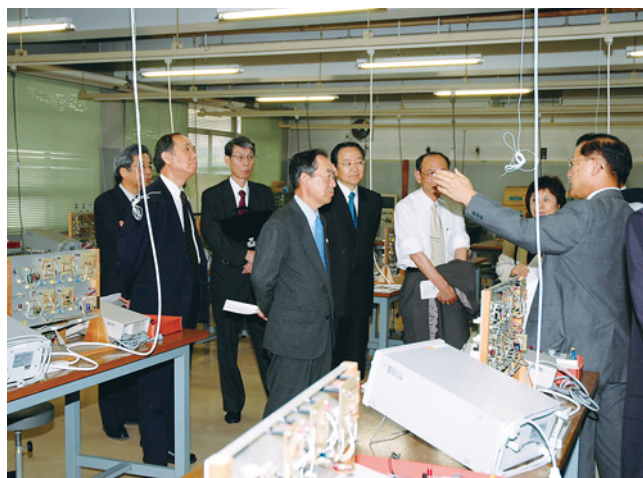
た。

続いて、赤崎記念研究館の整備計画及び理科系食堂の改善計画並びに外部資金の受入状況について、担当理事から説明が行われました。

なお、今回の経営協議会は、学外委員の方々に本学の諸施設を見学していただくということで、初めて本学のキャンパスで開催されたものであり、博物館、法科大学院模擬法廷教室、全学教育棟、知的クラスター、野依記念物質科学研究館といった見学会場では、それぞれ熱のこもった説明が行われ、委員の方々も長時間にもかかわらず、最後まで熱心に見学していただきました。



模擬法廷教室での見学の様子



全学教育棟での見学の様子

平野総長が「名大の歴史をたどる」（全学教養科目）で講義

平野総長は、6月7日（火）、全学教養科目「名大の歴史をたどる」において、約180名の学生を前に講義を行いました。

「名大の歴史をたどる」は、大学文書資料室が毎年開講する講義で、総説編（前身諸学校からの通史的な講義）と各説編（名大史ブックレット等を利用したテーマ別講義）の2部構成になっています。総長講義は、昨年度に引き続き2回目、今年度は総説編の最終回として「名古屋大学運営の基本姿勢－これからの名大－」をテーマに、約1時間20分の講義が行われ、会場の経済学部第2講義室は講義に熱心に耳を傾ける学生で満席となりました。

講義終了後、受講生が提出した感想文では、「総長の学生時代の話がとても新鮮だった。今、自分自身が直面しているのと同様に、かつては平野総長も人生について深く悩まれたという話を聞いて、親近感のようなものを感じ、感激した。」「学生のことを“構成員”と呼ばれていたことがとても印象的だった。」「名大がどういった取り組みをしているのか今までは興味もなかったが、いろいろと具体的な話を聞くとすごい事をやっているのだと思った。名大のいい面やこれからの課題など無関心でいるのは勿体な

く感じた。」といった意見が数多く見られ、今回の総長講義も昨年度と同様に受講生にとって大変有意義であったことが伺えました。

なお、総長講義については、中日新聞、読売新聞の各社が6月8日付朝刊に写真付記事を掲載しました。



講義する平野総長

山本副総長が世界学長会議に参加

山本副総長は、5月27日（金）から30日（月）の4日間、平野総長の代理として世界学長会議に参加するため、国際交流担当職員とともに中国遼寧省瀋陽市を訪問しました。

この会議は、中国遼寧省（瀋陽市）の主催で初めて開催されたもので、開催国の中国を含め14か国から124の大学（海外54校、中国70校）が参加し、大学行政と開発戦略をテーマに、28日（土）、29日（日）の2日間にわたって行われました。

会議では、初日に基調講演、翌日4つの分科会に分かれて各大学の発表が行われるとともに、遼寧省内の大学のポスターセッション及び各大学の担当者との意見交換も行われました。様々な大学の学長はもとより、国際交流に関わる教職員が一堂に会することにより、各国の事情、大学の状況についての情報交換が活発に行われ、今日の大学における問題が世界共通のものであるという認識を深めることになりました。最終日には、「携手并行 造福人類（共に手を取り合い進み、人類に利益をもたらそう）」を主旨とする共同宣言が採択され、今後の更なる世界規模での大学間交流に向けて新たな一歩を踏み出しました。

また、同会議の会場となった中国東北大学は、AC21メ

ンバー大学であり、赫冀成学長は、本学工学研究科で工学博士号を取得したOBで、本学フェローとして称号授与が予定されていることもあり、会期中に、赫学長をはじめ同大学教職員との懇談や、大学施設の視察も行いました。短い時間でしたが、赫学長の大学運営に懸ける熱い思いを拝聴し、今後より一層関係を深めていく同大学の現状や学生生活も垣間見ることができ、有意義な訪問となりました。



世界学長会議の様子

岡本佳男名誉教授が藤原賞を受賞

岡本佳男名誉教授・エコトピア科学研究所寄附研究部門客員教授が、第46回藤原賞を受賞し、6月17日（金）、学士会館において贈呈式が行われました。

藤原賞は、財団法人藤原科学財団が昭和35年から毎年、わが国の科学技術の発展に卓越した貢献をした科学者に贈る学術賞で、ノーベル賞や日本学士院賞受賞者、文化功労者として顕彰された研究者が数多く受賞しており、本学では、赤崎 勇特別教授に続いて2人目の受賞となります。

今回の受賞理由は、「キラル高分子の精密合成と機能開発」で、左右非対称の化合物を選り分ける高分子を合成し、新薬開発などに貢献したことが認められたものです。岡本名誉教授は、大阪大学在職中の昭和54年に、性質が同じであるために区別が難しい「右」と「左」の化合物を分ける高分子の精密合成に世界で初めて成功し、有用な化合物だけを取り出せる分離装置は、新薬開発になくてはならない装置となっています。平成2年に本学工学部応用化学科教授に着任後、平成16年3月に退任するまでの間に、化合物の「不斉合成」を先駆的に研究し、医薬品の開発や製造に貢献しました。また、ノーベル賞を受賞した野依良治特別教授の研究にも貢献しています。同年4月からはエコトピ

ア科学研究機構（現研究所）に創設されたキラル高分子工学（ダイセル）寄附研究部門の客員教授として、キラル高分子の合成手法、精密構造解析、その機能評価と応用に関する研究と若手研究者の育成に努めています。



あいさつする岡本佳男名誉教授

平野総長が日豪高等教育ラウンドテーブルに出席

平野総長は、6月6日（月）に愛知万博会場内のオーストラリア・パビリオンで開催された日豪高等教育ラウンドテーブルに、G. Brown シドニー大学長の推薦により出席しました。

この円卓会議は、愛知万博におけるオーストラリアの教育週間中に、オーストラリア学長会議（AVCC, Australian Vice-Chancellors' Committee）が日本側に呼びかけ実現したものです。

会議では、「日豪の大学セクターの概況」、「教育研究を通じた組織的連携」、「経営と財政」、「日豪教育連携の将来」を議題に、日豪の教育財政状況、資質向上、認証評価、科学技術離れ、職業教育、共同学位プログラム、Eラーニング、安全・危機管理等の連携協力について意見交換が行われ、来年度以降の会議開催の可能性についても今後検討することになりました。

なお、会議には、日本側から、平野総長のほか、文部科学省の泉審議官（高等教育担当）、松尾福岡教育大学長、岸浪北海道大学副総長、長田横浜国立大学副学長、村田同事務局長、井上岡山大学副学長、長田立命館大学総長、Grove 上智大学副学長、佐藤愛知大学経済学部長、オー

ストラリア側から、Murray Mclean 駐日オーストラリア大使、D. Yerbury AVCC 会長・マッコーリー大学長、J. Mullarvey 同事務局長、R. Dean キャンベラ大学長、P. Booth シドニー工科大学副学長、R. Lidi タスマニア大学長、セントラル キーンズランド大学副学長が出席しました。



参加者全員による記念撮影

総長裁量経費（研究奨励費）成果報告会を開催

平成16年度総長裁量経費（研究奨励費）成果報告会が、6月3日（金）、大学院国際開発研究科オーデトリウムにおいて、アカデミックプランの具体化に関するワーキンググループ（主査：岡本耕平総長補佐（研究推進担当）・環境学研究科教授）の主催で開催されました。

総長裁量経費は、平成16年度から教育研究内容・体制の



報告会の様子

改善充実や国際交流の推進など、大学改革の取り組みや特色ある大学づくりに必要な経費として措置されたものです。そのうち、研究奨励費は、本学の研究ポテンシャルをより向上させるため、新たな研究領域や分野など部局間にまたがる研究への挑戦を奨励するための研究会への助成を目的としており、昨年度は47件の申請があり、18件が採択され、4500万円が配分されました。

報告会は、岡本主査の司会の下、平野総長のあいさつに始まり、採択された18件の研究代表者等から、各報告時間10分という短い時間制限の中で、研究概要、問題点、他分野との連携、他の研究費獲得へのつながり等の要点を押さえた報告があり、これに対する質疑応答が行われました。

採択された研究分野からは、文系や理系、研究科やセンターを問わず多様な提案があり、本学の研究のポテンシャルの高さを示すとともに、これらの研究が今後の本学を代表するものへとつながることが大いに期待されます。

杉浦理事と豊田理事が附属農場を視察

杉浦理事（施設整備担当）と豊田理事（財務担当）が、5月24日（火）、大学院生命農学研究科附属農場を視察しました。

附属農場は、東山キャンパスから豊田市方面へ15km、自動車です約30分の愛知県東郷町にある面積28haの農場で、研究、実験及び実習に用いられています。

両理事による今回の視察の目的は、施設を中心としたもので、最初に、農業館で、横田附属農場長からパンフレットを用いて、農場の説明を受けた後、本館屋上に移動し、本館周辺の放牧地、水田、果樹園、ハウス、飼料圃場等について細かな説明を受けました。

続いて、両理事は、喜多一美生命農学研究科助教授から、牛舎及び堆肥舎について、また、柘植尚志生命農学研究科附属農場教授から、ソラ豆、スイカ、トウモロコシ等が育つ畑やトマトを栽培しているハウスなどについて説明を受けました。また、施設の改修の必要性と日本の食料の自給性について懇談を行いました。



本館屋上で説明を受ける杉浦理事と豊田理事

今年度の春季新入留学生歓迎懇談会を開催

今年度の春季新入留学生歓迎懇談会が、5月20日（金）、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この懇談会は、今春本学に入学した留学生を歓迎するとともに、今後の留學生活を実りあるものにするよう激励し、留学生と留学生関係教職員との懇談を通して、一層の相互理解・交流を深めることを目的として開催されたもので、



懇談会の様子

新入留学生、各副総長、各部署長、指導教員、留学生関係職員など約250名の参加がありました。

最初に、平野総長から激励、歓迎のあいさつがあった後、新入留学生を代表して、大学院国際言語文化研究科博士課程前期課程1年の田云明（中国）さん、留学生センター日本語研修生のBARRE, Nadia（モロッコ王国）さんが、日本での勉強についての抱負を述べました。続いて、中西国際開発研究科長の発声により乾杯が行われた後、留学生が総長や教職員を囲んで、歓談したり、記念撮影したりする姿が会場のあちらこちらで見られました。最後に、江崎留学生センター長から閉会のあいさつがあり、懇談会は終了しました。

教養教育実施組織会議・事務協議会を開催

平成17年度国立大学教養教育実施組織会議・事務協議会が、5月26日（木）、27日（金）の両日、野依記念学術交流館において、51の国立大学から教養教育実施組織の代表者ら約150名出席のもと開催されました。

初日の分科会では、「全学共通教育の全教員担当体制」、「Eラーニングの活用」、「大学の目標・理念等を実現するカリキュラムデザイン」、「教養教育の資質向上のための効果的なFD」の諸課題について、活発な討議が行われました。

また、分科会と並行して開催された事務協議会では、各大学から、「教養教育に関わる事務職員の資質向上の取り組み」についての報告があり、活発に情報交換が行われた後、中島英博高等教育研究センター助手による「学生の学習を支援するシラバスに向けた取り組み」と題する講演がありました。

翌日の全体会議では、若尾理事（教育担当）のあいさつに続き、小島文部科学省高等教育局大学振興課課長補佐から、国公私立大学を通じた大学教育改革の支援の充実等について説明がありました。続いて、同会議実行委員長の黒田教養教育院教務委員長（大学院工学研究科教授）を議

長に、各分科会から報告があった後、「成績評価の基準化」、「教養教育から見た法人化後の一年」について意見交換が行われました。



全体会議で報告する小島文部科学省高等教育局大学振興課課長補佐

国立大学法人等職員採用試験受験者 に対する説明会を開催



説明会の様子

東海・北陸地区国立大学法人等職員採用試験の受験者を対象にした大学説明会が、6月9日（木）、開催されました。

説明会は、午前・午後の2回、豊田講堂において行われ、平野総長のあいさつ、森理事（人事労務担当）による本学職員の採用方法、身分、待遇面についての説明の後、昨年度実施された法人化後最初の試験に合格し採用された職員から体験談等を交えた発表がありました。また、より詳しく本学の業務内容等を紹介するため、シンポジオンホールに、財務事務、学務事務等の職務内容ごとの説明コーナー、労働条件、研修等に関する人事労務コーナー及び若手職員による相談コーナーを設け、参加者からの質問に本学職員が直接対応しました。参加した600名余りの受験者は、真剣に本学職員の説明を聞き、熱心にメモをとっていました。

また、第一次試験合格者を対象にした「職場訪問」を7月1日（金）から8日（金）の週休日を含め8日間実施しました。

キャンパスクリーンウィーク実施



雑草の刈り取りに汗を流す杉浦理事

大学構内環境美化運動「キャンパスクリーンウィーク」が、名大祭終了後の6月6日（月）から10日（金）まで、全学の教職員及び学生の協力を得て実施されました。

これは、名大祭終了後の構内の環境美化のために、平成4年から毎年実施されているものです。また、キャンパスクリーンウィークのほかに、名大祭実行委員会を中心とした学生が、名大祭期間中にはゴミの分別回収、終了直後には清掃等を行い、構内美化に努めています。

本部では、6月8日（水）、山口施設管理部長のあいさつの後、杉浦理事（環境安全担当）や約80名の本部職員が、一斉に東山キャンパス構内及び周辺の市道に分かれ、空き缶や紙くず等の収集、雑草の刈り取り、側溝等の清掃などの作業を行い、爽やかな汗を流しました。

東海・北陸地区国立学校等 総務部課長会議を開催



会議の様子

東海・北陸地区国立学校等総務部課長会議が、6月2日（木）、本学を当番機関として、同地区の大学・高専・共同利用機関・青少年施設のうち29機関から、総務部課長等53名出席のもと開催されました。

会議では、当番機関を代表して、豊田理事・事務局長からあいさつがあった後、千葉総務企画部長から、4月22日に開催された関係10大学事務担当理事会議の報告が行われました。

続いて、文部科学省の高比良大臣官房人事課給与班主査から「人事上の諸問題」、山下同審査班主査から「労務上の諸問題」、また、日向野高等教育局国立大学法人支援課課長補佐から「組織改革、業務改善等の動向」についてそれぞれ情報提供があり、活発な質疑応答や意見交換が行われました。

シアノバクテリアの一日

近藤 孝男 大学院理学研究科教授

われわれ人類はいくぶん例外かもしれませんが、地球上のほとんどの生命は24時間の昼夜のサイクルのなかで生活しています。最も普遍的で重要だと思われるこの環境変化のなかで生命はどのように一日を送っているのでしょうか。私たちはいつも時計をもって生活しています。時計がどんなに役立っているかちょっと振り返ってみれば、その必要性はすぐ判ると思います。当然、動物、植物あるいはバクテリアにとっても時計によって時刻を認識し、その生活を調整することが有利なことは明らかです。このような事情で、我々ヒトも含め、生命は進化の過程で約24時間周期の時計機構（概日時計、生物時計ともよばれます）を細胞内に備えるようになったと考えられています。

私たちは、この概日時計が時を刻む仕組みを理解することと、概日時計が生物の生活をいかに豊かにしているかを理解したいと考え、概日時計を持つ最も単純な生物、シアノバクテリアを使って研究を進めています。シアノバクテリアは光合成に依存して生活する原核生物（細胞核を持たない生物）ですが、遺伝子組換えが容易な系統であるシネコッカス (*Synechococcus elongatus*) (図1) に生物発光酵素ルシフェラーゼの遺伝子を組み込み、概日時計の動きを光でモニター出来るようにしました (図2)。これを利用し、概日時計のミュータント（時計の周期が変化したものや時計機能を失ったもの）を手掛りに、3つの遺伝子がシアノバクテリアの概日時計の中心であることを見つけ、これらを *kaiA*, *kaiB*, *kaiC* と名付けました (*kai* は回という意味)。調べてみると、なか

でも *kaiC* 遺伝子が重要で、この遺伝子から作られる KaiC 蛋白質が *kaiC* 遺伝子の機能を抑制することが判りました。こうしたある反応の結果がその反応自身を抑制する現象は負のフィードバック制御とよばれますが、これは他の生物の時計遺伝子にも見られ、生命が時を刻む基本原理ではないかと考えられるようになってきました。

この辺りは1998年ごろまでに明らかになったのですが、細胞の中の詳細はよく判らず、なぜこのような仕組みで約24時間の安定した振動が生じるのかはよく判りませんでした。そこで世界中の研究者がいろいろな生物でこの問題を解明しようと研究を続けています。この問題の解答までにはまだまだ長い道程が必要だと思われるのですが、シアノバクテリアでは KaiC 蛋白質が KaiA 蛋白質と KaiB 蛋白質との協力で24時間周期でリン酸化サイクルを繰り返すことが重要なことが判ってきました。リン酸化とは蛋白質を構成する特定のアミノ酸にリン酸が付くことですが、これにより蛋白質の機能や安定性が大きく変わる重要な反応です。

さらに、最近私たちはこのリン酸化サイクルこそが24時間の時を刻む本体であることを突き止めることが出来ました。最初のきっかけは博士課程3年の富田さんが暗期のなかでリン酸化サイクルを調べたことでした。先に述べたようにシアノバクテリアは光合成に依存する生物ですから暗期では成長することが出来ず、遺伝子の発現も止まってしまう、遺伝子の発現に基づく概日時計も止まってしまうと予想されていたのですが、富田さ

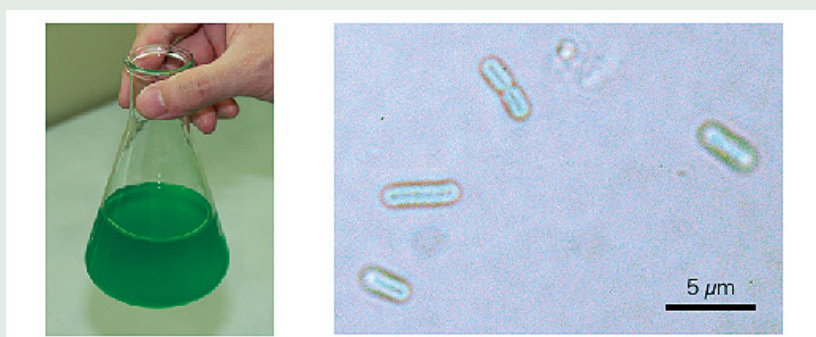


図1 シアノバクテリア *Synechococcus elongatus*
左はフラスコでの培養。シアノバクテリアのクロロフィルのため緑色をしている。右は顕微鏡で見たシアノバクテリア。

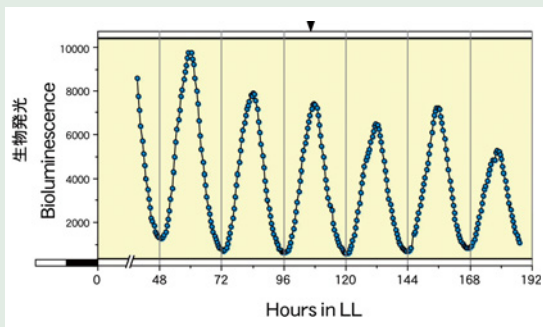


図2 生物発光で調べたシアノバクテリアの遺伝子発現リズム
シアノバクテリアに生物発光酵素の遺伝子を組み込み、遺伝子発現の強さに応じて発光するようにしたバクテリアを連続明条件下で調べた。約24時間周期で活発な概日時計の動きが見られる。

人は3日間の連続暗の状態でもリン酸化サイクルだけは活発に振動を繰り返していることを発見しました。これはそれまで概日時計の基本原則だと考えられていた時計遺伝子のフィードバック制御ではなく、KaiC蛋白質のリン酸化サイクルこそ

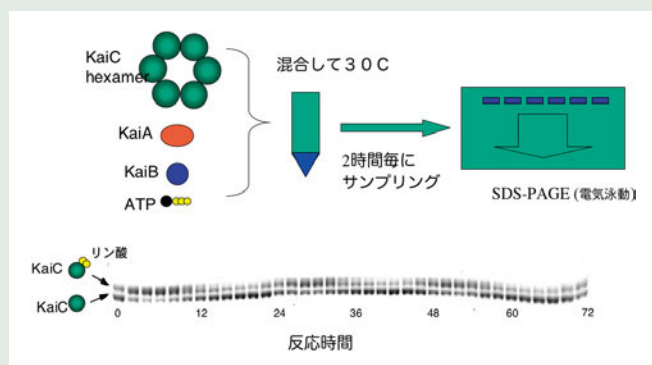


図3 試験管内で KaiC リン酸化リズムの再構成
精製した KaiC, KaiA, KaiB, ATP を混合し、2 時間おきにサンプリングした。72 時間にわたる KaiC のリン酸化パターンの変動。KaiC は 2 つのバンドになっており、上のバンドがリン酸化 KaiC, 下が非リン酸化 KaiC。交互に24時間周期で増減している。

が時を刻んでいることを示しています。さらに、この発見に刺激され、ポスドクの中嶋さんは精製した3つの Kai 蛋白質と ATP (アデノシン3リン酸) を試験管内で混ぜ合わせるだけでリン酸化サイクルを細胞内と同じように振動させることに成功しました(図3)。言うまでもなくこれは世界初の試験管内での概日時計の再構成で、3つの Kai 蛋白質が時を刻む分子であることを証明したものです。

このように私たちは KaiC のリン酸化サイクルがシアノバクテリアの概日時計の「振り子」に当たるものであることを明らかにしました。今後の課題は1) 3つの Kai 蛋白質がどのようなからくりで24時間の安定した振動を生じているのかを蛋白質の構造や機能の面から解明すること、2) 細胞内で KaiC のリン酸化サイクルがどのようにシアノバクテリアの遺伝子発現を時刻に合わせ調節しているかを解明することでしょう。さらに将来はこれらの研究からシアノバクテリアが概日時計を利用してどのように一日を送っているかを理解したいと考えています。

最後に私が岡崎の基礎生物学研究所から名大に戻って10年になりますが、この間70名を超す、学生、大学院生、ポスドク、技術補佐員、スタッフの人々の努力でシアノバクテリアの概日時計の研究を進めることが出来たことを記して、皆さんに感謝したいと思います。

1971年名古屋大学理学部を卒業後、大学院理学研究科を経て、1978年から基礎生物学研究所助手。1995年に名古屋大学理学部に戻り、現在に至る。趣味は、大学院のころは登山に熱中したが、今は眺める程度。

こんどう たかお



学び合うことの意義の探究

—授業におけるコミュニケーションの分析—

柴田 好章 大学院教育発達科学研究科助教授

個性は集団の中でこそ、発揮され磨かれる。このような考えが、とくに日本の学校教育においては大切にされてきました。様々な教科の中で、正解のあるなしに関わらず、学級集団として問題を討議し、互いの思考を高めることが、理想の授業として追求されてきました。いっぽう、学級の閉鎖性に対する批判や、教育の自由化や学習の個別化の動きなど、従来の学級という集団の単位を問い直す動きもみられます。学習における個と集団の関係は、教育学の古くからの課題でもあるのですが、今日のこのような状況のなかで、個と集団の関係を捉え直し、個別学習には解消しえない、集団で学ぶことの意義は何かを問い直すことが課題であると考えます。しかも、これを単に理念として論じるのではなく、実践を分析した成果にもとづき、誰もが承認しうる事実を積み重ねることが大切であると考えています。

こうした問題意識に基づき、私の研究は、集団のもつ教育力を、できるだけ研究者の解釈に頼らずに、可視化することを目指しています。とはいえ、集団の教育力ですから、個人の学力などとは違い、テストで直接に測定することはできません。そこで、授業のすべての発言・会話を文字化して、コンピュータで処理し、コミュニケーションの特徴を分析しています。これまで、語の出現頻度や、授業のどの場面で特

定の語が頻出しているかの出現パターンを、数値化したり、グラフィカルに表示したりする方法を開発してきました。一例を図1に示します。これらを通じて、個々の学習者が持っていたアイデアが他者に共有されていく過程や、当初は誰も考えていなかったアイデアが話し合いの中で生じる過程や、ある一人の個性的な発言が全体の追究の方向を動かしていく過程など、学級という学びのコミュニティの中で行われているダイナミックな相互作用の諸相を記述・表現してきました。

さらに現在、図2に示すように、教育の研究に携わる多くの人々が、ネットワーク上で、参加・協力・連携し、授業の事実に基づいて、知見を生成し共有できる、授業分析システムの開発を進めています。

図1 小学校社会科授業における話し合いを分析している画面の一例です。

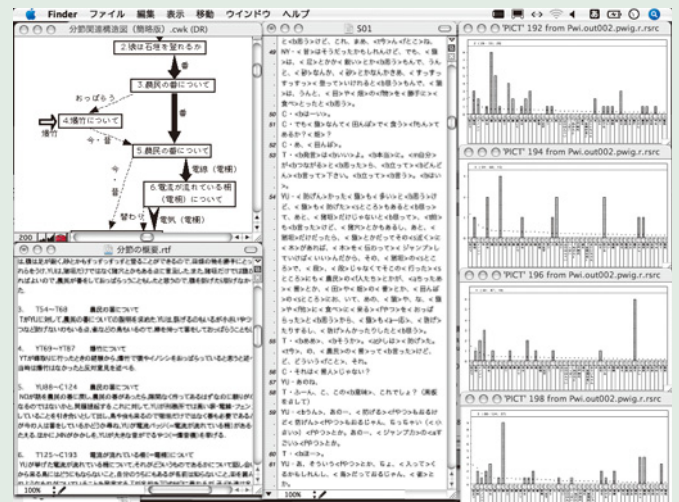
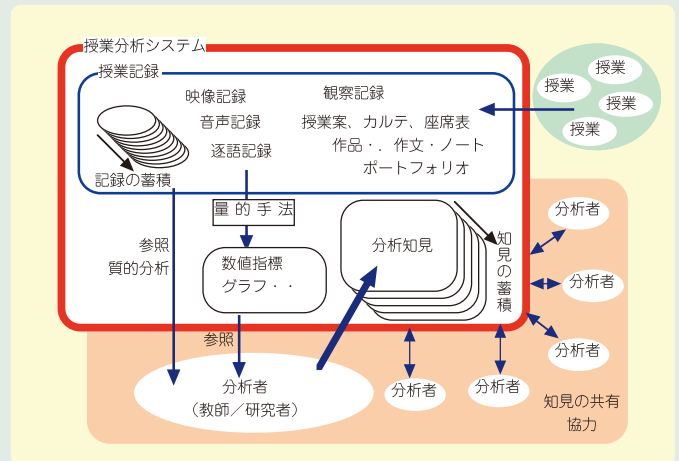


図2 開発中の授業分析システムの概要図です。主要な授業分析手法（量的手法、質的手法）の機能を内包し、授業の様々な記録と、各種の分析手法の結果等を統合的かつ質的に検討できるような環境を備えています。



1
2

日本のNGO職員から見たイラク復興支援事業

豊岡 正道
 特定非営利活動法人ピースウインズ・ジャパン プログラム・コーディネーター／イラク事業現地責任者



NGO職員として、私はイラク復興支援事業に関わっています。イラク北部に3つの事務所をおき、80人の現地スタッフとともに仕事をしています。診療所、給水施設、学校の建設・改修や医薬品供給のほか、障害者や貧困家庭などへの支援も行っています。寄付文化の乏しい日本の組織にあって、私の団体は欧米の大手NGOと肩を並べながら活動しています。

プログラム・コーディネーターとしての主な仕事は、支援事業の企画・運営、他団体との調整、事務所業務の管理です。他団体との調整は、時に交渉に近いものとなります。なぜなら、支援事業の獲得合戦が行われることもあるからです。私は案件獲得には強い交渉能力を持っていると自負していますが、どれだけ事前に調整していても、他のNGOが事業を「横取り」するというケースも希にあります。どんなに布石を打っておいても、最後はスピードとお金がものを言うという面もあります。

前の会社では、社員の名刺に“Value Integrator”という語が鮮やかに印字されており、私自身その言葉が気に入っていました。しかし残念ながら“価値の統合者”とはほど遠い、短い商社マン時代でした。今NGO職員としてよ

うやく現地と日本の支援との架け橋の役割を担うべき立場になっています。もっとも、特に何かスキルを身につけた上での結果ではなく、むしろ、イラクに関わっているという希少価値だけの方が大きいかもしれませんが。

しかし、そうした日本の支援も、昨年起きた日本人質事件によって一石を投げられました。ボランティアとNGOの区別の問題は別にして、紛争地域における国際支援のあり方は、今後ますます議論される余地があるように思います。

今、イラク北部はめざましい復興を遂げつつあります。一方で、政治的に不安定な要素も更に表出しつつあります。このような状況下で、NGOの役割も急激に変化しています。新しい復興・開発段階の支援事業だけでなく、私は、現地事務所の組織改革にも着手しています。名大で学んだことを日々実践できる環境だけが、安月給をして私をこの仕事にとどまらせていると言えるかもしれません。



とよおか まさみち
 1974年生まれ
 福井県福井市出身
 2002年大学院国際開発研究科国際協力専攻博士課程前期課程修了
 大学卒業後青年海外協力隊に参加し、理数科教師としてタンザニアの中等学校に赴任。帰国後、国連ボランティア・越冬支援要員として旧ユーゴスラビア・コソボ自治州に赴任。大学院卒業後、商社勤務を経て現職（安全上の理由から、現在は隣国ヨルダンなどから現地スタッフに指示を出している）。

1
 |
 2

- 1 戦争によって、人的に破壊された診療所（ケスカラ診療所ニネヴェ州シェハン地区ケスカラ村）
- 2 家庭の問題で家を出た女性の保護施設（カンザッド・ハウス アルビル州アルビル市内）にて。左が筆者。

低年次生の学習意欲を高める大学論をめざす

全学教養科目「大学でどう学ぶか—名大と名大生について知ろう」

近田 政博 高等教育研究センター助教授

名古屋大学の場合、新入生の基礎学力や学習意欲は決して低くありません。ところが、入学後しばらく経ってからやる気を喪失する学生が少なくないようです。いったい、何が彼らをそうさせるのでしょうか。

それを少しでも食い止めることができればと思って、昨年度から高等教育研究センターと学生相談総合センターの共同企画で全学教養科目「大学でどう学ぶか—名大と名大生について知ろう」を提供しています（2年生後期、全学部対象、月曜2限）。ここでは、昨年度実施した授業内容についてご紹介します。この授業の目標は、名古屋大学と名大生について多角的に認識を深め、学生生活をより充実できるような知見を得ることです。具体的には、下記のような目標設定を行いました。

- ・高校から大学、社会人へと「学び」のあり方がどのように変化するのかを理解する
- ・名古屋大学がどのような方向に進もうとしているのかを知る
- ・日本の大学生および名大生がどのような学習意識を持っているのかを知る
- ・大学生の自己形成について理解を深める
- ・将来設計のための基本的な方法論を学ぶ

この授業ではさまざまな課題を受講生に与えました。授業前には予習教材(写真1のコースパケット)を読んできて、コメントを電子掲示板に書き込んでもらいます(「ゴーイング・シラバス」というシステムを使っています)。毎回の授業の最後10分間では、ゲストスピーカーに対する感想や特定のテーマについてコメントペーパーに書いてもらいます。回収したコメントペーパーは教員が

赤ペンでコメントを入れたのち、次回の授業の最初に紹介し、返却しました。このコメントペーパーの提出枚数を出席点としてカウントしました。さらに、成績評価はこの出席点と4つの単元ごとの達成課題(下記)に基づいて行いました。

- ・第1単元「後輩に贈る名古屋大学での勉強法5か条」
- ・第2単元「私が名大で学びたいこと」
- ・第3単元「教育機関としての名古屋大学に対する要望」
- ・第4単元「充実した大学生活を送るための方法について、対人関係、自己啓発、将来設計のいずれかに絞って、自分の考えをまとめる」



写真1 コースパケット(シラバスと予習教材を収めたもの)



写真2 最後の授業で、受講者に決意表明「今すぐやること」を紙に書いてもらい、黒板に貼りだしてもらいました。

最後の授業では、受講生各自の決意表明として、「今すぐやること」を紙に書き出してもらい、それを黒板に貼りだしてもらいました(写真2)。これはなかなか学生に好評でした。

この授業実践を通して、教師としていろいろなことを実感しました。第一に、多くの学生は大学での学習活動を充実させたいと考えているが、有効な手がかりを見つけられずにストレスを溜めているようです。第二に、大学での学習活動に困難をきたしている理由として、能動的な学習ができていないことを挙げる意見が最も多く、反対に、自分の学習活動を肯定的に評価している学生は、

教員との出会い、学びたい内容、具体的な将来目標があり、自分自身に対する基本的な動機づけができています。第三に、受講生同士で話し合う時間を設定し、その内容を発表させるワークショップ形式は、教室の雰囲気をリラックスさせ、意見交換を活発化させる上で一定の効果があると思われる。

低年次生を対象とする大学論においては、大学紹介だけにとどまらず、「学生がどのようにして大学の中で居場所を見つけ、周囲と関わり、主体的に学ぶことができるのか」、その手がかりを示すことが求められているようです。

名古屋大学高等教育研究センター助教授 博士(教育学)
1967年愛知県生まれ
1995年名古屋大学大学院教育学研究科修了
名古屋大学教育学部助手、名古屋大学高等教育研究センター講師を経て現職
モットー：家内安全
趣味：昼寝と温泉めぐり

ちかだ まさひろ



人間の特権…芸術交流企画で見えてきた自分



2004年4月、6ヶ月のメキシコ留学から帰るや否や日本イベロアメリカ芸術交流支援団体を立ち上げた。任意団体だが、個人よりも団体のほうが社会の信頼も得られるはずという安易な考えであった。私はメキシコの芸術にあふれた日々を日本でも実現したかった。芸術は人間の自由意志を無限に伝える方法であり、人間らしく生きるために欠かせないのだと、表現力を失った人々、目標の見えない若者に伝えたかった。自己を表現することとは今を精一杯生きることであり、その努力こそが人間の特権であり、自分の居場所を確立する方法だと。「芸術」で表現する方法を持ち合わせていなかった私は、芸術と生きる生活を手に入れることで、そしてよいと信じることをやることで、自分の居場所を見つけようと、気持ちだけは強く、版画交流企画を進めた。

この版画交流企画は、メキシコ・スペイン・日本の若手版画芸術家が、一緒に作品を制作しその後展覧をするという企画であり、日本・メキシコ・スペインを巡回する。第1段が日本と決まり、まず愛知県内の芸術大学に連絡をとった。その後、既存する関係団体に連絡を取り、中日新聞社の後援を取り付け、その他の団体や協会、大使館を回った。十分な後援を得た後は企業に協賛を求める。名古屋大学の学生である特権は、トヨタをはじめ大手企業の方が客員講師、教授として在籍してい

るので、コネクションを利用しながら、数え切れない企業に電話をし、アポイントを取り、担当者と会いプレゼンテーションを行う。はじめは断られる度に落込んだものの、開き直りと回を重ねることが、自分の企画そして自分自身への自信へと変わっていった。

現在は、個人の寄付も多くいただき日本企画の必要経費が集まり、一段落と思っていた。しかし日本・スペイン・メキシコとの交渉方法の相違などに、留学経験があっても戸惑うことがでてくる。7月4日から始まる日本展は、名古屋芸術大学の版画工房を拠点とし、名古屋大学野依記念学術交流館でも展覧を行う。7月はじめには9名のスペイン・メキシコ芸術家がやってくる。1ヶ月前の今から期待と不安が数時間ごとに私の心をかき乱している。そして、その日々の心の変動を楽しんでいる私がいる。ここまで応援してくださった方々に感謝し、これからも精一杯頑張っていきます。



- | | |
|---|---|
| 1 | 2 |
| | 3 |
- 1 民芸品を売るインディヘナ
 - 2 Real de Catorce で知り合ったイタリア人と、右が筆者
 - 3 モレリアのカテドラル

あさか ゆき
1981年ナイロビに生まれ、大学のために日本に戻る。

学内の情報技術に思う

全学技術センター 共通基盤技術支援室情報通信技術系課長
安藤 孝彦

非常に難しく、業務依頼も上手くこなすことが出来にくい状態で、必要な人材を探しては業務をこなすということになります。

最近、ウイルスやワームが非常に多くサーバーはもとよりクライアント機器も感染し、感染した機器がネットワーク上にあると次々に感染を起こします。学内ではネットワーク上に機器が多く存在している関係で、頻繁に感染が起こり、感染した機器をそのままにして置くわけにはいかないため、その対応に四苦八苦です。それらの関係を含めて個別のコンピューター機器のトラブルも多く、必要に応じて手分けして対応しています。私の周りで起きている現象は、たぶん大学全体の問題であろうと思いますが、それらにすべて対応するには人数が足りません。今後の問題であろうと思いますが、人数とそれに伴う技術力の質の問題も有ります。情報関係の業務をこなすには、技術力が必要で研修及び教育の必要性を強く感じます。人によっては、そんなことは「納入業者にやらせれば」とか、「外注すれば」とか言いますが、機器が故障した人にとっては、出来るだけ早く対応してくれる人がいれば、その方が良いと思っています。ただ、その様な人材も評価ということになるとなかなか評価されません。このあたりが今後の問題でしょう。

私は、教養部生物学教室に採用され、情報文化学部ができた際に情報関係の業務に携わるようになりましたが、情報関係の業務にも関わるうちにコンピューターに興味を持ち、コンピューターの勉強をするようになりました。当時のコンピューターは、機器自体も貧弱なものでコマンドによる操作が主体でした。ワープロソフト「一太郎」の作業は、非常に使いにくいものでしたが、それでも、コンピューター自体の持つ文字変換に比べれば、一太郎付属のそれは、使いやすいものでした。

情報文化学部は、情報関係の教育を行う学部であり、情報関係の業務ができる人材が必要ということで関わるようになりましたが、ネットワークを勉強しなければ業務ができないということが分かり、ネットワークを勉強することになり、学内LANの維持管理に関わっていた先生の御指導も得ました。その頃、人間情報学研究科もできていて、この関係の先生方にも色々お世話になりました。

大学の法人化を機に、全学技術センターを作ることになり、同センターの作業部会の一員に選ばれ、3年あまりにわたり色々検討を重ねました。同センターの発足当初は全学の技術職員全員で構成される内容でしたが、異論もあり変則的な立ち上げになりました。暫定的な構造での組織運営は



マイコンピューターと筆者

あんどう ゆきひろ
1947年2月22日生まれ

名古屋大学協力会の設立

—産学官連携のさらなる発展を目指して—

太田 美智男 総長補佐（産学官連携担当）／大学院医学系研究科教授

名古屋大学は国立大学法人名古屋大学として平成16年4月に新たに出発しました。

本年は法人化後2年目を迎え、さらなる発展を目指しております。日本経済は相変わらず厳しい状況にありますが、大学を取り巻く環境も厳しいと言わざるを得ません。その中で名古屋大学は法人化による自主性・自律性を活かして大学の発展を図るとともに、社会への貢献についても積極的に取り組んでおります。

このたび、名古屋大学では産業界との連携をいっそう促進するために、「名古屋大学協力会」を設立することになりました。

我が国の産業界がより活性化し世界の中で競争力を維持するために、大学の役割が強く期待されております。したがって大学と産業界とが互いの存在意義を認め合い良い環境を保つためには、ふだんからの地道な交流活動が必要ですが、「大学は敷居が高い」とよく言われます。名古屋大学協力会は名古屋大学と産業界との敷居を無くし、大

学の各研究室の研究内容を知っていただく機会を提供し、さらにセミナー、研究会などを通じて大学と企業が交流する場を設けることにより、知識を高めるとともに相互のニーズや要望を知ってより良い連携を深め、その結果大学と企業が一体となって明日の日本を築いていくことを目的としています。またそれによって協力会会員企業と名古屋大学がともに発展できることを確信しています。

このような趣旨をご理解いただき、多くの企業の皆様が名古屋大学協力会へ積極的に参加されることを期待しております。

問い合わせ・申し込み先
 名古屋大学協力会 設立委員会事務局
 名古屋大学研究協力・国際部社会連携課内
 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
 TEL：052(789)5545 FAX：052(788)6002
 E-mail：sangaku@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名古屋大学協力会趣意書

1. 会の名称：名古屋大学「協力会」
 会員は企業（法人）、自治体、公共機関ならびに名古屋大学に属さない個人とする。名古屋大学に所属する職員、学生等は特別会員とする。
2. ねらい：会員企業と大学間の双方向コミュニケーションを促進し、名古屋大学の研究を、会員企業に対し提示するとともに、大学研究室と企業ニーズ・シーズとの連携を行う。
3. 主な事業
 - ①名古屋大学のイベント、研究紹介などの大学からの情報と、会員企業の技術やニーズ・シーズ情報を、双方向情報媒体として3～4回／年発行する。（ニュースレターなど）
 - ②それぞれの分野やテーマごとに研究会（分科会）を立ち上げ、大学と会員企業の情報交換の場を設けるとともに共同研究・共同開発を促進する。
 - ③セミナー、シンポジウムを開催し、最新の情報を提供する。
 - ④上記②、③においては交流・懇親の場を設ける。
4. 推進体制
 - ①「協力会」会長は産学官連携担当副総長とする。幹事を大学（産学官連携総長補佐）、会員企業からそれぞれ若干名置く。事務局長は総長補佐が担当する。顧問あるいは名誉会長：名古屋大学総長。
 - ②事務局は名古屋大学内に置く。
5. 会費
 法人ならびに公共機関会員の会費は3万円／年、個人会員は5千円／年とする。

名古屋大学協力会 平成17年度事業計画

協 力 会 事 業	
H17年 7月	・ 設立総会 ・ 第1回セミナー、交流会
8月	・ ニュースレター No. 1 発行
9月	・ 研究会・分科会設立
10月	・ 研究室セミナー／見学会（医学部・医学系研究科）
11月	・ 研究室セミナー／見学会（工学部・工学研究科） （テクノ・フェア名大2005の中で相互協力として実施）
12月	・ 第2回セミナー、交流会 ・ ニュースレター No. 2 発行
H18年 1月	・ 研究室セミナー／見学会（農学部・生命農学研究科）



名古屋大学協力会の位置づけ



愛知万博を記念した連続国際フォーラム・シンポジウム開催

●大学院経済学研究科附属国際経済動態研究センター



3日のシンポジウムのパネルディスカッションの様子

大学院経済学研究科附属国際経済動態研究センター（ERC）と日本経済新聞社の企画による連続国際フォーラム・シンポジウムが、6月2日（木）、3日（金）の両日、開催されました。

2日午後には、「愛・地球会議」テーマフォーラムが、「21世紀の産業基盤～循環型社会へのメッセージ」をテーマに、日本経済新聞社と2005年日本国際博覧会協会の共催で、経済学部カンファレンスホールにおいて開催され、約460名が参加しました。

基調講演では、ホセ・ゴールデンバーグ元ブラジル環境相が、「持続可能な発展のためには先進国の環境保全のための技術を早急に発展途上国に移転させる必要がある」と述べました。続いて、池淵浩介環境パートナーシップ・CLUB会長が、中部地区の産学官が連携し、環境問題についての地域連携や啓発活動を行なっていることを、また、大鶴英嗣松下電器産業常務取締役が、「地球環境との共存」のために製品リサイクル等に取り組んでいることを紹介しました。

パネルディスカッションでは、茅陽一地球環境産業技術研究機構副理事長の司会の下、ゴールデンバーグ氏、福川伸次電通顧問及び平野総長がパネリストとして参加



2日のフォーラムで報告する平野総長（日本経済新聞社・安藤英賢氏撮影）

し、環境技術の普及や先進国から途上国への移転の問題、政府の役割等について活発な議論を行いました。また、平野総長は、大学の社会的役割を果たすため、古紙の学内リサイクル等、費用をかけてでも環境に配慮した仕組みの構築に取り組んでいると報告しました。

また、3日には、第20回国際経済動態研究センターシンポジウム「地球温暖化と日本経済－市場メカニズムを活用して地球温暖化対策をどう進めるか－」が、ERC、(社)キタン会、日本経済新聞社の共催で、経済学部カンファレンスホールにおいて開催され、400名を超える参加がありました。

開会のあいさつで、平野総長は、同シンポジウムが、本学が行なう一連の万博記念国際フォーラムの最初のサテライトシンポジウムであるとともに、ERCとキタン会が実施してきた社会連携活動の一環でもあると紹介しました。続いて、田丸征克 ERC 教授が趣旨報告を行った後、セッション1「EU、米国、ロシア等の動向と市場メカニズムの活用」では、フランク・コンベリー欧州環境資源経済学会会長と松尾直樹クライメート・エキスパート代表が、セッション2「京都メカニズムの活用と課題」では、新澤秀則兵庫県立大学教授と山田和人パシフィック・コンサルタンツ地球環境グループリーダーが報告を行いました。

昼食後の事例報告「東海地域の企業等の取り組み」では、中部電力、名古屋環境取引所、トヨタ自動車から報告があり、また、セッション3「日本の地球温暖化対策と政策課題」では、岸本吉生経済産業省環境経済室長と清水康弘環境省温暖化対策課長の報告、植田和弘京都大学教授、浅岡美恵 NPO 法人気候ネットワーク代表、久留島豊一 INAX 環境戦略部長からコメントがありました。

最後のパネルディスカッションでは、三橋規宏千葉商科大学教授の司会の下、各セッションのモデレーターを務めた平石尹彦 IPCC 温室効果ガス・インベントリー計画共同議長、岡松壯三郎経済産業研究所理事長、井村秀文環境学研究科教授から総括報告があった後、全員で討論を行いました。

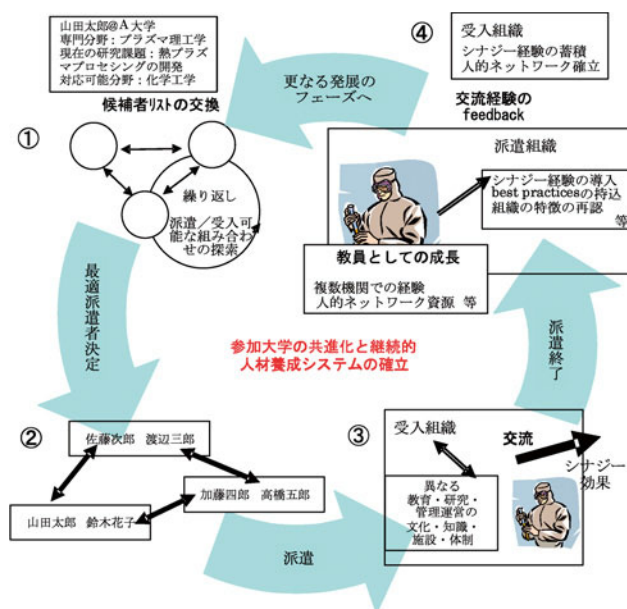
若手教員の人材相互交流に3大学が合意

●大学院工学研究科

大学院工学研究科は、5月18日（水）、平成18年度から東京工業大学理工学研究科工学系及び大阪大学工学研究科との間で、若手教員の相互交流プログラムを開始することに合意しました。

このプログラムは、将来、研究・教育・組織運営のリーダーとして活躍が期待できる若手教員を相互に派遣することにより、新たな研究分野に挑戦してもらうとともに、他大学の教育方法や組織運営を学ぶことで、将来の同研究科の発展に寄与できる人材を育成することを目的としています。国立大学では初の取り組みです。交流の対象者は、派遣期間終了時点で45歳以下の助教授及び講師で、3年の期間終了後は元の大学へ復職することを原則としています。派遣先の大学では、講義の担当、卒業論文や修士論文の指導、学位審査等を行い、教育面で中心的な役割を果たすとともに、各種会議等の組織運営に積極的に参加します。

今後、各大学での受入条件を整備し、研究科内での公募により、候補者を決定した後、3大学で組織するマッチング委員会で希望者の研究テーマ等を検討して、今年中に受入大学を決定する予定です。



工学系人材交流プログラムの概念図

東芝との研究インターンシップ説明会開催

●大学院工学研究科・大学院情報科学研究科

「名古屋大学工学研究科・情報科学研究科と東芝との研究インターンシップ説明会」が、5月19日（木）、工学部4号館大会議室において開催され、46名の大学院学生が参加しました。

この説明会は、大学院学生が研究者や技術者として必要な幅広い見識を養うとともに、実社会への適応性を身に付けることを目的として、東芝との間で3月25日に締結した「研究インターンシップに関する協定」（本誌144号25頁参照）に基づいて行われたもので、東芝から示された46件の研究テーマについて、各受入部門の担当者から説明がありました。

今後は、説明会で示された研究テーマの中から、大学院学生から希望があったテーマについて、個別に研究インターンシップの受入期間、実施方法等を協議し、10名程度の大学院学生を1～6か月の間、東芝の各研究部門へ派遣するとともに、研究内容等の評価も行う予定です。



概要を説明する山下勝比呂氏（㈱東芝 技術企画室理事 産学連携グループ長）

農業教育公園・農業ふれあい教室（第1回・第2回）開催

●大学院生命農学研究科附属農場

大学院生命農学研究科附属農場は、今年度の農業教育公園事業の一環として、5月21日（土）、6月11日（土）、農業ふれあい教室の第1回、第2回を開催しました。

今年度の同教室は、地元の小学生とその保護者を対象に、4回の教室を通して土の中に棲息する微生物が農業に意外



サイレージを作る参加者（第1回）

な形で貢献していることを学習します。

第1回では、有機肥料であるコンポストと牛の肥料であるサイレージを作りました。コンポストは、枯れ草と家畜排泄物を混合して好気発酵させます。材料中の有機物は微生物によって分解され、植物が栄養として利用できるようになります。また、サイレージは、刈り取った牧草を容器の中で嫌気状態にし、乳酸発酵させることによって長期間貯蔵可能にしたものです。

第2回では、前回作ったコンポストとサイレージの状態について観察しました。コンポストでは、材料に含まれる有機物が好気性微生物により分解し、アンモニアが揮散している様子の観察と、温度計を用いてコンポストの温度を測定し、発酵により温度が40度近くまで上昇している様子の確認を行いました。サイレージでは、嫌気状態が保たれないとカビの発生を招いたりして保存が上手くできないことを観察しました。続いて、肥料が植物の生長に与える影響を調べるため、コンポストを混ぜた赤土とコンポスト無しの赤土を用意し、ヒメヒスベリヒユとコダカラソウの苗の植え付けを行いました。次回以降、これらの苗の生長を観察していく予定です。

今年度の国際言語文化研究科公開講座始まる

日本像を探る－外から見た日本・内から見た日本－

今年度の大学院国際言語文化研究科公開講座が、6月3日（金）、文系総合館カンファレンスホールにおいて、始まりました。

今年度は、「日本像を探る－外から見た日本・内から見た日本－」をテーマに、7月22日までの毎週金曜日全8回にわたり、日本像をめぐる様々な視点から講義が行われています。今年度の受講者は、昨年度を上回る39名で、幅広い年齢層の方々が受講しており、中には、夫婦で受講している方もいます。

第1回は、開講に当たり、近藤同研究科長からあいさつがあった後、松本伊瑳子同研究科教授による「灯台下暗し、お宝再発掘－仏教と陰陽五行説から見た日本人像」と題する講義が行われました。松本教授は、ヨーロッパ思想に根源的な二項対立原理と比較して、仏教・陰陽説・五行説等の東洋思想が、いずれも自他の関係性、相互共存性、宥和性等をその根本原理とするものであること、したがってこれらの思想はエコロジー時代にふさわしい大きな可能性を持っていることなどを話しました。受講者はノートを取りながら熱心に聞き入り、講義後には質問も相次ぎました。

今年度の公開講座では、第1回以降も活気のある講義が行われ、好評を得ています。



講義する松本伊瑳子国際言語文化研究科教授

宇宙天気研究に関する4者連携協定キックオフミーティング開催

●太陽地球環境研究所

宇宙天気研究に関する4者連携協定キックオフミーティングが、6月10日（金）、陸別町タウンホールにおいて開催されました。

このミーティングは、太陽地球環境研究所が平成17年3月、宇宙環境情報科学分野における北海道での調査、観測、研究等において広く相互協力することを目的として、北海



キックオフミーティングの様子

道陸別町、北海道電力株式会社、独立行政法人情報通信研究機構と連携推進協定を締結したのを記念して開催されたもので、関係研究者、町民等100名近くの参加がありました。

ミーティングでは、4者の代表によるあいさつに続いて、平野総長及び独立行政法人情報通信研究機構理事長からの祝電が披露された後、11名の国内外の大学、研究機関の専門家が、「宇宙天気研究」、「地磁気変動が電力システムに及ぼす影響」、「放射線帯」、「オーロラ観測」、「レーダー観測計画」、「南極から見た宇宙・地球環境」をテーマにそれぞれの研究成果について講演を行いました。また、宇宙天気予報の国際組織である国際宇宙環境情報サービスの議長であるカナダ地質調査所のデビット・ボテラー博士が講演を行い、地磁気擾乱誘導電流が地上の発電・送電設備に甚大な被害を与えた事例について説明し、宇宙天気予報の重要性を指摘しました。

同研究所では、今年度以降、レーダーや磁力計等の観測装置を集中的に設置し、宇宙天気に関する観測及び研究を実施することにしており、今回の協定に基づき、4者間の情報交換や共同研究、観測データの相互利用等を積極的に進めていくことにしています。

太陽地球環境研究所が一般公開と講演会を実施

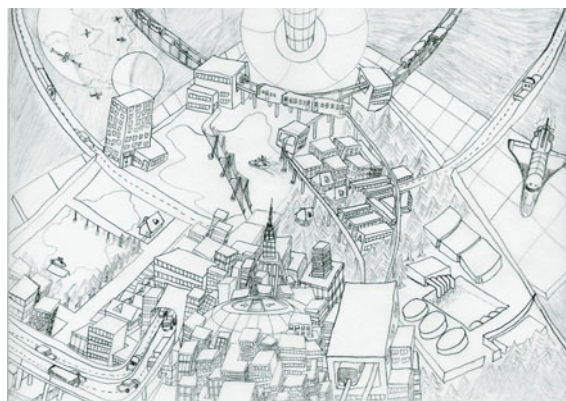
太陽地球環境研究所は、6月4日（土）、豊川キャンパスにおいて、豊川市及び豊川市教育委員会の後援を得て、第14回一般公開と講演会を開催しました。

この催しは、同研究所の最新の研究成果を市民にわかりやすく説明し、理解してもらうことを目的として開催されているもので、毎回多くの市民が参加し、教職員や大学院学生等にとっても市民との貴重なふれあいの場となっています。

当日は天候に恵まれ、400名以上の参加があり、太陽地球環境に対する関心の高さを伺わせました。

今回の一般公開では、初の試みとして、「宇宙に関する絵画コンクール」（テーマ：50年後の宇宙での生活、対象：豊川市内の小学校高学年）を企画し、48点の応募の中から、審査の結果、金賞1名、銀賞2名、銅賞3名を選出しました。当日行われた表彰式では、一般公開委員長の増田 智同研究所助教授から受賞者に賞状と副賞が手渡されました。また、研究紹介コーナーでは、実験・観測装置の展示、研究紹介パネルの展示や説明、ビデオ上映等が行われ、見学者が自分の手で触って動かせる企画も多数あり、子供たちにも好評でした。

講演会では、松原 豊同研究所助教授が、「太陽から飛んでくる高エネルギー粒子」と題して、太陽から地球に飛来する高エネルギー粒子の謎に迫り、続いて、西谷 望同研究所附属ジオスペース研究センター助教授が、「電波で調べる宇宙の天気」と題して、レーダーを使って地球の周りの宇宙の様子を調べる方法について講演しました。参加者は、講演者のユーモアを交えたわかりやすい説明に熱心に耳を傾け、講演後には、活発な質疑応答も行われました。



絵画コンクールで金賞となった御油小学校6年・菅沼将伍君の作品

シンポジウム「沖縄亜熱帯域の水循環の観測研究」開催

●地球水循環研究センター

情報通信研究機構－名古屋大学共同シンポジウム「沖縄亜熱帯域の水循環の観測研究」が、6月8日（水）、東京都小金井市にある独立行政法人情報通信研究機構（NICT）において開催されました。

このシンポジウムは、NICTが電波の有効利用のための開発研究の一部として沖縄に整備している電波による大気海洋リモートセンサ施設のより広い利用のため、地球水循環研究センターとNICTの電磁波計測技術部門との共同研究を進めることを目的として開催されたもので、同センターとNICTを中心に、NICTのTV会議システムによる沖縄からの3名を含め計58名の参加がありました。

シンポジウムでは、NICTの塩見 正理事、山本理事のあいさつ（中村健治同センター教授代読）の後、沖縄における降水観測の意義、近年注目されている偏波気象レーダの実用性、衛星からの降雨観測における地上検証、大気境界層観測への期待、沖縄周辺域における海洋観測の重要性、NICT沖縄の施設とデータ紹介の6件の講演が行われました。

同シンポジウムをキックオフとして、今後の活動及び成果が期待されています。



山本理事のあいさつを代読する中村地球水循環研究センター教授

第6回エコツアー開催

●廃棄物処理施設

廃棄物処理施設は、6月4日（土）、5日（日）、第46回名大祭の企画として、環境指導員室及び名古屋大学消費生活協同組合と共催で、第6回エコツアーを開催しました。

この催しは、全国の大学に先駆けて本学が平成12年4月から実施している一般ごみの分別回収（20項目）や古紙リサイクル等の活動内容及びその成果や現状を一般の方々に広く周知し、ごみ問題への関心を高めることを目的としています。

エコツアーは、①名大祭でのごみの分別回収の説明（豊田講堂前リサイクルステーション）、②本学でのごみの発生量や処理方法等のパネルによる説明（環境指導員室）、③古紙シュレッダーの体験（古紙中間処理施設）の3か所を回るスタンプラリーの形式で実施され、各チェックポイントでは、参加者に、本学のごみの分類を説明したクリアホルダー（日本語・英語・中国語）や本学の古紙をリサイクルしたトイレットペーパー等が配られました。

今回は、259名の参加者のうち、約80%の206名が全てのチェックポイントを回りました。参加者は、小学生からお年寄りまで幅広く、他府県からも多数おり、各々の家庭でのごみの対処と本学のごみ問題への取り組みを比較しな

がら、環境にやさしい生活を送ることの重要性を実感していました。

参加者へのアンケート調査から、本学のごみ問題に関する活動を高く評価していることがわかり、また、参加者の中には、毎年参加している方もおり、エコツアーが回を重ね認知されつつあることを伺わせました。



本学でのごみの発生量や処理方法等の説明を聞く参加者

大学連携キャンパス講座「おもしろ博物学」開催

●博物館



講義する足立博物館長（第1回）

博物館は、名古屋市生涯学習センターとタイアップして、5月16日（月）から毎週月曜日の午後に、7回シリーズの名古屋大学連携キャンパス講座「おもしろ博物学」を開催しました。

この連携講座は、博物館が中期目標・中期計画で掲げている地域貢献・地域連携の一環として行われたもので、講座の案内や参加者の募集は名古屋市生涯学習センターが担当しました。今回は希望者が定員の約4倍と多く、抽選の結果、60名が受講しました。

世界の多くの博物館には、自然そのものや自然とヒトとの関わりを取り扱う博物学（動物学、植物学、鉱物学、古生物学、考古学等）の標本が数多く展示されており、本学博物館にも世界でここにしかないという博物学の標本が展示・収蔵されています。同講座では、博物館に所属する7名の教員が講師となり各自の専門分野に関連した講義を行うとともに、展示室での標本の解説や分類等の実習も実施されました。参加者は熱心で、講義中に鋭い質問が多数あつ

たほか、講座の前後に特別展示や常設展示をじっくりと見学する姿も見られました。

第1回は、足立博物館長が「地質と地名から濃尾平野（名古屋）の生い立ちを考える」をテーマに講義を行いました。講義では、natural history の和訳である博物学は博物館学とは全く異なるという解説があった後、「おもしろ博物学」講座の全体像について説明がありました。続いて、濃尾平野の北端に位置する岐阜の金華山、医学部附属病院付近の鶴舞、吹上、古井坂、狭間等、東山キャンパス付近の唐山、末盛、振甫などの由来が、地質・地形・歴史・植物の情報を組み合わせて解説されました。

その後、第2回「出土資料から昔の食生活を考える」、第3回「岩石と鉱物と化石」、第4回「生きている地球」、第5回「伊勢湾・三河湾の海とそこに棲む生き物」、第6回「ニワトリの動物学と名古屋大学」、第7回「東海地方の植物たち」が行われ、いずれも好評でした。



遺跡から出土した千年くらい前の魚の骨をニシンとホッケに分類する受講生（第2回）

博物館第40回特別講演会開催

－ 邪馬台国時代の東海の風景 －



講演する赤塚氏

博物館は、6月5日（日）、現在開催中の第8回特別展「時を測る」と名大祭の関連行事として、愛知県埋蔵文化財センターの赤塚次郎氏による第40回特別講演会「邪馬台国時代の東海の風景」を開催し、市民や本学の学生など約150名が参加しました。

赤塚氏は、愛知県埋蔵文化財センターで多くの遺跡の発掘をしており、東海地方を中心に弥生時代・古墳時代を研究しています。講演で、赤塚氏は、遺跡から発掘された多くの遺物のデータから、東海地方には邪馬台国に対抗する勢力が存在したことが示されること、また、その中心地の遺跡とその構造について話しました。講演後には、会場から多くの質問が出され、活発な意見交換があり、その後、展示された土器を前にギャラリートークも行われました。

ICCAE2005年度 第1回オープンセミナー開催

● 農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センターは、6月2日（木）、同センターの研究機関研究員である佐々木太郎氏を講師として、「Diffusion of Cultivation Rights and Management of Forest Village Project in Thailand」をテーマに、2005年度第1回オープンセミナーを開催しました。

セミナーには、大学院生命農学研究科の教員、森林資源論を専門とする学生のほか、大学院国際開発研究科の学生などが参加して、具体的なフィールドワークに基づいて、1975年に森林局によって開始された森林村事業について住民参加の実態に関する政策評価が行われました。森林村事業をコミュニティ・フォレストリーの枠組み、住民参加と

いう意味合いから捉え直し、広く日本における国有林地元施設との比較に至るまで、様々な視点に立って活発な質疑応答が行われました。



オープンセミナーの様子

4. 5 ドイツ ノルトライン・ヴェストフォーレン州 (NRW) 科学研究省次官等

Hartmet KRebs NRW 州科学研究省次官、Martina Munsel 同省国際交流担当官、Dirk Matejovski NRW 州科学センター代表及び Astrid Becker エヌ・アール・ダブリュージャパン代表取締役社長が訪問され、同州内の2大学と本学の複数部局(工・物国セ)でそれぞれ進められている共同研究等の現状と今後の交流促進(学術交流協定締結・学生交流等)について懇談が行われました。

4. 6 フランス国民議会議員等

Christian Cabal フランス国民議会(下院)議員、Claude Gatignol 同議員及び Matthieu Meissonnier フランス元老院(上院)行政官が訪問され、両国の科学技術等に関し意見交換が行われました。

3氏は、フランス科学技術選択評価議員会議(OPECST:国民議会議員(下院)と元老院議員(上院)で構成される)の活動の一環として、低公害車(EFV)に関する調査のため来日され、その際に本学を訪問されたものです。

4. 8 DFG (ドイツ科学財団) 会長等

Ernst-Ludwig Winnacker DFG 会長、Joerg Schneider 同研究トレーニンググループ・研究キャリア部長、Johannes Karte 同地学プログラムディレクター及び Gernot God 同国際課長が訪問され、物質科学国際研究センターが中心となり進めているドイツ・ミュンスター大学との連携プログラム等について懇談が行われました。

一行は、愛知万博の日本におけるドイツ年の行事に参加するため来日され、その際に本学を訪問されたものです。



4.13 タイ教育省国際交流部顧問等

Orachart Suebisith タイ教育省国際交流部顧問及び Natthawut Luedee 国立チェンマイ・ラチャパット大学講師が訪問され、教育交流等について意見交換が行われました。

同国際交流部顧問等は、教育視察、国際理解教育及び日タイ相互教育交流、タイからの留学生の実態調査などのために大学院国際開発研究科を訪れ、その際に表敬訪問されたものです。

4.13 同済大学長等

万鋼同済大学学長、楊東援同大学副学長、薫琦同大学外事担当学長補佐及び薛松涛同大学教授が訪問され、本学との学術交流推進について意見交換が行われました。



4.15 ペンシルベニア大学副医学部長

Neal Nathanson ペンシルベニア大学副医学部長が訪問され、国際学術コンソーシアム(AC21)への加盟について懇談が行われました。

4.22

韓国慶南大学校総長等

朴在圭慶南大学校総長、高義石同大学校産学協力団長、李相千同大学校産学協力団副団長、韓成大同大学校工学部長、朴海龍同大学校工学部助手及び李慶美東京大学客員教授が訪問され、本学との大学間学術交流協定締結の可能性を含めた今後の学術交流推進等について懇談が行われました。



4.28

韓国東国大学校総長等

洪起三東国大学校総長、金英敏同大学校国際交流室長・国際教育院長及び金煥基同大学校日本文学科教授が訪問され、本学との大学間学術交流協定締結の可能性を含めた今後の学術交流推進等について懇談が行われました。

5.13

韓国海洋大学校総長等

金順甲海洋大学校総長及び李建洙同大学校国際協力院長が訪問され、本学との学術交流推進について意見交換が行われました。



5.24

ベトナム法律家協会会長等

Pham Quoc Anh ベトナム法律家協会会長及び Dao Tri Uc 同協会副会長が訪問され、大学院法学研究科が取り組んでいるアジア諸国との「法整備支援事業」の実情等について懇談が行われました。



5.27

セントラルミシガン大学長

Michael Rao セントラルミシガン大学長他1名が訪問され、本学との学術交流協定締結の可能性を含めた学術交流推進等について懇談が行われました。

6.13

上海交通大学校務委員会主任等

馬徳秀上海交通大学校務委員会主任、呉松同大学学長補佐、徐飛同大学学長補佐、曹友誼同大学人事処副処長及び許万国同大学国際合作与交流処課長が訪問され、本学との学術交流推進について意見交換が行われました。



受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H16.11.20	計測自動制御学会 システム情報部門学術講演会2004 優秀論文賞	大学院工学研究科助教授	鈴木 達也	早川聡一郎（豊田工業大学）と連名
H17. 3. 8	アメリカ機械学会フェロー	名誉教授	松崎 雄嗣	
H17. 3.29	2004年度日本数学会賞代数学賞	大学院多元数理科学研究科教授	松本 耕二	
H17. 4. 6	名古屋駅ロータリークラブ椿賞	大学院環境学研究科教授	奥宮 正哉	
H17. 4. 8	2004年度日本機械学会 奨励賞（研究）	大学院情報科学研究科助手	張 賀東	
H17. 4. 8	2004年度日本機械学会 奨励賞	エコトピア科学研究所講師	木村 英彦	
H17. 4.12	アメリカセラミックス学会フェロー	大学院工学研究科教授	河本 邦仁	
H17. 4.12	日本建築学会 奨励賞	大学院環境学研究科助教授	田川 浩	
H17. 4.19	有機合成化学協会東海支部 支部奨励賞	大学院工学研究科講師	坂倉 彰	
H17. 4.20	平成17年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）	大学院工学研究科教授	福田 敏男	詳細は本誌144号 p.11参照
H17. 4.20	平成17年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（研究部門）	大学院情報科学研究科教授	高木 直史	詳細は本誌144号 p.11参照
H17. 4.20	平成17年度科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学賞	大学院理学研究科教授	山口 茂弘	詳細は本誌144号 p.11参照
H17. 4.20	平成17年度科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学賞	大学院工学研究科助教授	西澤 典彦	詳細は本誌144号 p.11参照
H17. 4.20	平成17年度科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学賞	大学院環境学研究科助手	三村 耕一	詳細は本誌144号 p.11参照
H17. 4.20	平成17年度科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学賞	大学院情報科学研究科助教授	川合 伸幸	詳細は本誌144号 p.11参照
H17. 4.20	Distinguished Service Award（功労賞）	大学院工学研究科教授	福田 敏男	
H17. 4.21	溶接学会 貢献賞	大学院工学研究科教授	宮田 隆司	
H17. 5. 3	第58回中日文化賞	大学院理学研究科教授	近藤 孝男	詳細は本誌145号 p.13参照
H17. 5. 3	第58回中日文化賞	大学院医学系研究科教授	二村 雄次	詳細は本誌145号 p.13参照
H17. 5.11	第51回構造工学シンポジウム論文賞	エコトピア科学研究所教授	館石 和雄	判治 剛（大学院工学研究科 D3）、鬼頭和也（大学院工学研究科 M2）と連名
H17. 5.14	日本分析化学会 分析化学論文賞	大学院工学研究科教授	平出 正孝	
H17. 5.16	平成17年度日本冷凍空調学会賞 優秀講演賞	大学院工学研究科助手	琵琶 哲志	
H17. 5.18	東海化学工業会賞	大学院工学研究科助手	井藤 彰	
H17. 5.19	2005年度日本写真学会 論文賞	医学部保健学科助手	市川 勝弘	藤田広志（岐阜大学）と連名
H17. 5.19	自動車技術会 2004年秋季大会学術講演会 優秀講演発表賞	大学院工学研究科助教授	鈴木 達也	
H17. 5.19	第7回LSIIP デザイン・アワード 開発奨励賞	大学院工学研究科助教授	前澤 宏一	前原 渉（大学院工学研究科 M1）、酒向万里生（大学院工学研究科博士課程前期課程修了生）、水谷 孝（大学院工学研究科教授）と連名
H17. 5.20	日本都市計画学会 論文奨励賞	大学院工学研究科助手	木方 十根	
H17. 5.20	電気学会 学術振興賞（論文賞）	エコトピア科学研究所教授	大久保 仁	早川直樹（大学院工学研究科助教授、エコトピア科学研究所寄附研究部門助教授）と連名
H17. 5.20	電気学会 優秀技術活動賞（技術報告賞）	エコトピア科学研究所教授	大久保 仁	早川直樹（大学院工学研究科助教授、エコトピア科学研究所寄附研究部門助教授）と連名
H17. 5.20	情報処理学会 論文賞	情報連携基盤センター教授	吉川 正俊	
H17. 5.21	日本材料学会 学術貢献賞	大学院工学研究科教授	大野 信忠	
H17. 5.26	地盤工学会 国際会議若手優秀論文賞	大学院工学研究科助手	中井健太郎	中野正樹（大学院工学研究科助教授）、金田一広（港湾空港技術研究所）と連名

受賞者一覧

教員

受賞日	受賞名	所属・職名	受賞者	備考
H17. 5.26	社団法人日本塑性加工学会 日本塑性加工学会 賞新進賞	大学院工学研究科助手	吉田 佳典	
H17. 5.27	土木学会 田中賞論文賞	大学院工学研究科教授	宇佐美 勉	加藤基規（三菱重工業）、葛西 昭（大学院工学研究科講師）と連名
H17. 5.27	第59回日本セラミックス協会賞 進歩賞	大学院工学研究科助教授	太田 裕道	
H17. 5.28	電子情報通信学会 業績賞	大学院工学研究科教授	谷本 正幸	
H17. 5.30	2004年度日本トライボロジー学会 論文賞	大学院情報科学研究科助手	張 賀東	三矢保永（大学院工学研究科教授）、福岡夏子（大学院工学研究科博士課程前期課程修了生）、福澤健二（大学院工学研究科助教授）と連名
H17. 6.17	第46回藤原賞	名誉教授、エコトピア科学 研究所客員教授	岡本 佳男	詳細は p.6参照

学生

受賞日	受賞名	所属・学年	受賞者	備考
H17. 1.31	IEEE 名古屋支部学生奨励賞	大学院情報科学研究科 D2	立岩佑一郎	安田孝美（大学院情報科学研究科教授）、横井茂樹（大学院情報科学研究科教授）と連名
H17. 3.24	電信情報通信学会 DEWS2005優秀論文賞	大学院情報科学研究科 D1	清水 敏之	吉川正俊（情報連携基盤センター教授）と連名
H17. 4. 1	日本化学会 春季年会学生講演賞	大学院理学研究科 D3	竹谷 文一	高橋けんし（太陽地球環境研究所助手）、松見 豊（太陽地球環境研究所教授）と連名
H17. 4.10	第61回日本放射線技術学会 総会学術大会 学生賞金賞	大学院医学系研究科 M2	堀井亜希子	
H17. 4.10	第61回日本放射線技術学会 総会学術大会 学生賞銅賞	医学部保健学科 3年	西村 裕子	
H17. 4.16	日本機械学会 フェロー賞	大学院工学研究科 M2	深山 雅人	
H17. 4.19	土木学会中部支部 平成16年度優秀研究発表賞	大学院工学研究科 M1	撫養 啓祐	
H17. 4.20	IEEE Robotics and Automation Society Japan Chapter Young Award	大学院工学研究科 D2	丸山 央峰	
H17. 5.26	第39回日本理学療法学術大会 学術大会長賞	大学院医学系研究科 D1	縣 信秀	
H17. 5.31	低温工学・超伝導学会 2005年度優良発表賞	大学院工学研究科 D2	田代 優亮	

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年5月16日～6月15日]

記事	月日	新聞等名
1 生物時計：近藤孝男・理学研究科教授のグループは原始的な単細胞生物のらん藻の生物時計を試験管内で再構築することに世界で初めて成功	5.16 (月)	サンケイ
2 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム『21世紀の創造』の愛知万博セッション「私たちの未来を見つめて—地球環境と科学」が15日開催 理化学研究所理事長・野依良治・本学特別教授は基調講演「未来世代のための科学と技術」で環境調和の化学が必要と話す	5.16 (月) 5.28 (土) 6.10 (金)	読売
3 時のおもり：早稲田大学教授・池内了・本学名誉教授 JRの重大事故に思う	5.16 (月)	中日 (朝刊)
4 ひと・仕事：イゴリ・サベリエフ・国際開発研究科助教授 19世紀後半から20世紀初頭にロシア極東地域へ移住した日本人と中国人、朝鮮人の歴史をまとめた『移民と国家』を刊行 知られざる移民史に光	5.16 (月)	中日 (朝刊)
5 第33回大サロン 有田隆也・情報科学研究科教授が「人工生命—小さな人工世界の中の大きなビックリ」と題して23日講演	5.17 (火)	中日 (朝刊)
6 産学官連携組織「P-DRGS コンソーシアム」(総括代表・森川高行・環境学研究科教授)が新型ナビゲーションシステム「PRONAVI」の実証実験を6月から始めると発表	5.18 (水)	朝日 (朝刊) 他2社
7 経済教室：公務員改革 高すぎる給与水準是正 太田聡一・経済学研究科教授	5.18 (水)	日経 (朝刊)
8 訃報：近藤哲生・本学名誉教授	5.18 (水) 5.19 (木)	中日 (朝刊) 他3社
9 日本網膜色素変性症協会の全国大会が29日に開催 三宅養三・本学名誉教授が講演	5.18 (水)	中日 (朝刊)
10 「名古屋リウマチネットワーク」(代表・石黒直樹・医学系研究科教授)が6月5日にリウマチの治療をテーマに市民公開講座開催	5.18 (水) 5.30 (月)	中日 (朝刊)
11 日本物理学会名古屋支部主催公開講演会「タンパク質の4次元構造」28日開催 坂田誠・工学研究科教授の講演など	5.18 (水) 5.24 (火)	中日 (朝刊)
12 医療事故情報総会記念シンポジウム「院内事故調査委員会について考える」21日開催 シンポジストに上田裕一・医学系研究科教授ら	5.18 (水)	中日 (朝刊)
13 ココロザシ高く 名古屋の社会起業家たち：海苔網再利用で起業 石川孔明さん・本学学生	5.18 (水)	中日 (朝刊)
14 本学、東京工業大学、大阪大学の3大学の工学系研究科間で来年度から「人材相互交流プログラム」実施 3年間の派遣期間を終えた時点で45歳以下の助教授・講師を対象に人事交流	5.19 (木)	中日 (朝刊) 他3社
15 スマトラ島沖地震で地表の振動が300キロ上空の電離圏にまで影響することを確認 大塚雄一・太陽地球環境研究所助手らのグループ	5.19 (木) 5.20 (金)	読売 中日 (朝刊)
16 冷凍マンモス「ユカギル・マンモス」に関する最新の研究成果について、6月18日に各国の研究者が集まって公開討論会形式で発表 日本からは小澤智生・環境学研究科教授らが参加	5.19 (木) 5.23 (月)	朝日 (朝刊) 日刊工業
17 地方議会のあり方を考えるシンポジウム21日開催 小野耕二・法学研究科教授が「分権時代の市民・議員・行政のあり方」と題して講演	5.19 (木)	朝日 (夕刊)
18 愛知県の大学生と本学などの中国人留学生が日中関係のあり方を討論する「日中学生平和交流会議」が愛知工業大学で21日開催	5.20 (金)	読売
19 昨年度部員2名と存続の危機にあった本学応援団に新入生2名が入部 窮地乗り越え練習に力	5.20 (金)	中日 (朝刊)
20 訃報：高木豊・本学名誉教授	5.20 (金) 5.21 (土)	中日 (夕刊) 読売
21 名古屋市議会の3市議が政務調査費のあり方などをテーマにしたシンポジウムを21日開催 小野耕二・法学研究科教授も登壇	5.21 (土)	中日 (朝刊)
22 中村俊夫・年代測定総合研究センター教授らは、愛・地球博長久手会場に展示されている冷凍マンモスの体毛を前後各50年の精度で1万8340年前のものと特定 6月18日に開催される「ユカギルマンモス・シンポジウム」で発表	5.22 (日) 5.23 (月)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
23 愛・地球博の連続シンポジウム「愛・地球会議」が「環境本位型社会を目指して—21世紀の科学のあり方」をテーマに21日本学で開催 上出洋介・太陽地球環境研究所教授ら討論	5.22 (日) 6.7 (火)	朝日 (朝刊) 他2社
24 愛知憲法会議などが6月から来年3月まで連続10回の講座「い・ま・こ・そ・憲法」を開催 愛知憲法会議事務局長・森英樹・本学理事は「大学並みの本格的な講義を受ける絶好の機会」と参加を呼びかける	5.22 (日)	朝日 (朝刊)
25 「ケプラー予想」書評：早稲田大学教授・池内了・本学名誉教授	5.22 (日)	日経 (朝刊)
26 南海トラフで巨大地震が起きる時、東海地震が単独では起きにくいことを平原和朗・環境学研究科教授らがスーパーコンピューターを使ったシミュレーションで解析	5.23 (月)	朝日 (朝刊)
27 インタビュー領空侵犯：日本ガイシ株式会社代表取締役会長・柴田昌治・全学同窓会副会長 間違いだらけの食文化	5.23 (月)	日経 (朝刊)
28 With：本学奇術研究会 客を引き込む世界観	5.23 (月)	朝日 (夕刊)
29 本学と名古屋工業大学、豊橋技術科学大学の3つの国立大学法人と愛知県、名古屋市、愛知建築士会などの建築関連団体が連携した「愛知建築地震災害軽減システム研究協議会」の設立総会が23日開催	5.24 (火)	中日 (朝刊) 他3社

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年5月16日～6月15日]

記事	月日	新聞等名
30 独立法人化から1年 医学部附属病院の改革について立川幸治・医学部附属病院教授に聞く：患者の利便、快適性を重視	5.24 (火)	読売
31 第20回国際経済動態研究センターシンポジウム・第20回キタン国際学術シンポジウム 名古屋大学万博記念パートナーシップ事業「地球温暖化と日本経済―市場メカニズムを活用して地球温暖化対策をどう進めるか―」6月3日開催	5.24 (火)	中日 (朝刊)
	6. 3 (金)	毎日 (朝刊)
	6. 4 (土)	日経 (朝刊)
	6. 6 (月)	
32 沓名宗春・工学研究科助教授 ファイバーレーザーをミラーに反射させて効率よく溶接する技術を早く確立したいと意気込み語る	5.25 (水)	日刊工業
33 インド美術仏教美術研究会6月11日開催 見田降鑑さん・大学院文学研究科博士課程後期課程の研究発表など	5.25 (水)	中日 (夕刊)
	6. 8 (水)	朝日 (夕刊)
34 情報連携基盤センターが運用する学内情報ポータル「名古屋大学ポータル」のデータベース基盤を日本オラクルが無償のオープンソースから刷新	5.26 (木)	日刊工業
35 愛・地球会議「21世紀の産業基盤～循環型社会へのメッセージ」を6月2日本学で開催	5.26 (木)	日経 (朝刊)
36 沓名宗春・工学研究科助教授らの研究グループは亜鉛メッキ鋼板とアルミニウム合金の溶接技術開発	5.27 (金)	日刊工業
37 太陽化学と大平英樹・環境学研究科助教授は、共同で緑茶に多く含まれるアミノ酸のL-テアニンに抗ストレス作用があることを確認	5.27 (金)	日経 (朝刊)
38 京都大学などの調査で母乳からPBDE 検出 那須民江・医学系研究科教授コメント：生体への影響を明らかにする必要がある	5.27 (金)	中日 (朝刊)
39 良医めざして：家庭医 伴信太郎・医学部附属病院教授は「専門医から家庭医になる医師の再教育も重要なテーマになる」と話す	5.27 (金)	朝日 (朝刊)
40 学生記者奮闘中：ジュニア特派員に同行した浜田陽介さん・本学3年生 子どもの可能性に期待	5.27 (金)	読売
41 改革本番大学トップに聞く：中部大学学長・山下興亜・本学名誉教授 “知識創造型”を目指す	5.27 (金)	日刊工業
42 平野総長らが26日金沢統一・陸別町長と懇談 科学と地域で熱い連携を	5.27 (金)	北海道新聞
43 本学や大阪大学などの研究班が JAXA 三陸大気球観測所で「高X線撮像気球」を目指した実証と観測に成功	5.27 (金)	東海新報
44 太陽地球環境研究所は京都大学生存圏研究所附属信楽 MU 観測所に設置している全天カメラで関東地方から九州地方にかけての広い範囲で26日夜に目撃された「火球」の撮影に成功	5.28 (土)	中日 (朝刊)
		読売
45 大阪の発信力：大阪の街そのものをロボット化 福田敏男・工学研究科教授は「大阪での取り組みを期待。地域の産業活性化だけでなく、『人間にとってロボットはどうあるべきか』といった根本的な問題について全世界的な議論の中心になるべき」と話す	5.28 (土)	サンケイ
46 メコンへの架け橋：絨毛がん予防に井篁一彦・医学部附属病院講師らはベトナム語の解説書を作って医療従事者向けに配るなど「名大方式」移植に力	5.28 (土)	毎日 (夕刊)
47 読売新聞社調査 議会出席に「費用弁償」東海3県で29市 小野耕二・法学研究科教授コメント：「実態にそぐわない、高額な費用弁償を受け取っている議員は自主的に改善に動くべき」	5.30 (月)	読売
48 主婦・大岩和子さんによるネコをテーマにした作品展が医学部附属病院内の喫茶店「ねむ」で31日まで開催	5.30 (月)	中日 (朝刊)
49 大幸医療センターで6月から「禁煙支援自由診療」開始 がんリスクを遺伝子の型で診断	5.31 (火)	中日 (朝刊)
50 奥宮正哉・環境学研究科教授、辻本誠・東京理科大学教授ら 低エネルギー型の冷房装置「ドライミスト」装置普及を目指すベンチャー企業「なごミスト設計」設立	5.31 (火)	日経 (朝刊)
51 訃報：森川寿・本学名誉教授	5.31 (火)	朝日 (朝刊) 他3社
52 国立大学法人化から1年 国立大学協会専務理事・松尾稔・本学名誉教授に聞く：求められるユーザーの視点	5.31 (火)	中日 (朝刊)
53 きらり：名大祭本部実行委員会委員長・村田靖さん・本学理学部3年生 人気の名大祭、学生の力を感じてほしいと意気込む	5.31 (火)	中日 (朝刊)
54 老いについての公開講座 葛谷雅文・医学系研究科助教授が「高齢者のからだどこころ～イキイキ老後をすすすために～」をテーマに6月6日講演	5.31 (火)	日経 (夕刊)
55 第58回中日文化賞贈呈式が31日に行われる 近藤孝男・理学研究科教授、二村雄次・医学系研究科教授ら受賞	5.31 (火)	中日 (夕刊)
56 名古屋大学フェローの第1号に赫冀成・中国東北大学学長を選定	6. 1 (水)	毎日 (朝刊)
57 第46回藤原賞を岡本佳男・エコトピア科学研究所寄附研究部門客員教授・本学名誉教授が受賞	6. 1 (水)	中日 (朝刊)
	6. 7 (火)	他3社
58 伊勢湾の今：生息域汚濁で激減の危急種ナメクジウオ発見 西川輝昭・博物館教授は貴重な発見と話す	6. 1 (水)	朝日 (朝刊)
59 エコ物語：愛・地球博長久手会場のイタリア館の「イタリア館エコマップ」 EXPO エコマネーセンター長・谷口庄一・本学研究員らが共同で作成 独自の取り組み PR	6. 1 (水)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年5月16日～6月15日]

記事	月日	新聞等名
60 本学水工学講座・土木学会水工学委員会主催で豪雨洪水被害軽減のための連続講演会開催 第1回では辻本哲郎・工学研究科教授が昨年の豪雨災害の特徴を分析	6. 1 (水) 6. 7 (火)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
61 マックス・プランク宇宙物理学研究所のフォルカー・シュプリング博士と吉田直紀・理学研究科助手らのグループが、「暗黒物質」の存在を前提とした、スーパーコンピューターを使った過去最大規模のシミュレーションを実施し、宇宙の形成過程を再現。	6. 2 (木)	中日 (朝刊) 日刊工業
62 第46回藤原賞受賞者の業績紹介 岡本佳男・エコトピア科学研究所寄附研究部門客員教授・本学名誉教授の受賞理由は、「キラル高分子の精密合成と機能開発」で、左右非対称の化合物を選り分ける高分子を合成し、新薬開発などに貢献	6. 2 (木)	読売
63 本学大学院生らで作るグループ「名大津波被災者支援院生有志会」が名大祭期間中にスマトラ沖地震津波の被災者支援を訴えるイベントをインドネシア学生協会名古屋支部の留学生らと協力して開催	6. 2 (木)	中日 (朝刊)
64 NPO 法人「先端医療を推進する会」(代表理事・岩田久・本学名誉教授) は一般向けに健康講座「運動器と先端医療」、「東洋医学と健康」を開催	6. 2 (木)	中日 (朝刊)
65 訃報：三宅正男・本学名誉教授	6. 2 (木)	中日 (朝刊) 他4社
66 福和伸夫・環境学研究科教授らが考案 住宅の耐震化の重要性を分かりやすく説明できる住宅型教材「ぶるる」	6. 2 (木)	中日 (夕刊)
67 北川泰雄・生命農学研究科教授、鳥居修平・医学系研究科教授、協和発酵の共同研究グループは患者自身のごく少量の皮下脂肪と血液をもとに骨や脂肪組織を作る技術開発	6. 3 (金)	日経 (朝刊)
68 留学生は見た！おらがパピリオン：本学学生のウィーナ・ジェード・ヘラさんが見たフィリピン館 独自の文化の色を出せず残念	6. 4 (土)	毎日 (朝刊)
69 東亜天文学会記念公開講演会11日開催 福井康雄・理学研究科教授が「大宇宙の誕生」について話す	6. 4 (土)	中日 (朝刊)
70 住基ネットに反対する市民の会主催講演会『「新しい人権」なぜ憲法に明記するの?』12日開催 講師に愛敬浩二・法学研究科教授	6. 4 (土)	中日 (朝刊)
71 愛・地球博会場と国際宇宙ステーションを無線通信で結ぶプロジェクト「スクールコンタクト」第1回研修会が5日、野依記念学術交流館で開催	6. 6 (月)	中日 (朝刊)
72 学力・ゆとり考：愛知県東海市の富木島中学校の国語力向上への取り組み 的場正美・教育発達科学研究科教授らの提案した「授業研究会」のやり方を採用	6. 6 (月)	中日 (朝刊)
73 キャリアの軌跡：お茶の水女子大学学長・郷通子・本学名誉教授 外の目で母校改革に挑む	6. 6 (月)	日経 (夕刊)
74 名大サロンの主役：有田隆也・情報科学研究科教授 人工生命一小さな人工世界の中の大きなビックリ	6. 7 (火)	中日 (朝刊)
75 大学文書資料室が経済学部の前身にあたる名古屋高等商業学校の歴史をまとめたブックレットを刊行	6. 7 (火)	中日 (朝刊)
76 ディケンズ・フェロウシップ日本支部春季大会11日開催 片木篤・環境学研究科教授の講演など	6. 7 (火)	中日 (朝刊)
77 平野総長が7日特別講義「名古屋大学運営の基本姿勢—これからの名大」で大学の運営方針を約180名の学生らに語る	6. 8 (水)	中日 (朝刊) 読売
78 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 看護師いない病院なんて	6. 9 (木)	朝日 (朝刊)
79 本学と名古屋市立大学、名古屋工業大学は今秋をめどに「医工連携」協力態勢を構築	6.10 (金)	日経 (朝刊)
80 本学と名古屋工業大学、豊橋技術科学大学が連携して、低コストの耐震化の技術開発を図るため、3大学の実験設備を効率的に運用した地震災害軽減事業を開始	6.10 (金)	読売
81 東海地方5月の地震：林能成・災害対策室助手	6.10 (金)	読売
82 中部ペンクラブ創立20年記念 18、19日に全国同人雑誌会議開催 堀内守・本学名誉教授をコーディネーターに「同人雑誌という土俵」をテーマに討論会など	6.11 (土) 6.15 (水)	読売 朝日 (朝刊)
83 留学生は見た！おらがパピリオン：本学学生のジョナサン・リーさんが見た米国館 偉人より文化の多様性を示すべき	6.11 (土)	毎日 (朝刊)
84 愛・地球博に合わせ地元愛知の大学でも万博理念イベント 本学では「人間と自然の共存」をメインテーマに議論、学生たちの提言をまとめる予定	6.14 (火)	中日 (朝刊)
85 大学院教育発達科学研究科在学中に起業した大沢憲明さんが今春、博士課程前期課程を修了して事業に本腰 指導教員で起業のアドバイス役を務めてきた牧野篤・教育発達科学研究科助教授は「おれたちを見てくれ、といえるような生き生きとした姿を見せてほしい」と話す	6.14 (火)	中日 (朝刊)
86 第24回 COE オープン・レクチャー「統合テキスト科学の構築」15日開催 周藤芳幸・文学研究科教授が「ロゼッタストーンテキスト科学」と題して講演	6.14 (火)	中日 (朝刊)
87 国際言語文化研究科公開シンポジウム「国際報道はいま—あなたの知らないもう一つの『戦場』」27日開催	6.14 (火)	中日 (朝刊)
88 本学と東京工業大学、大阪大学の工学系研究科の若手教員交流：組織改革の刺激 研究者の流動化促進も	6.15 (水)	日刊工業

平成17年度名古屋大学公開講座

■全学企画

テーマ：情報が世界をつくる！

内容：様々な視点から「情報が世界をつくる」ありさまを明らかにし、高度情報社会と言われる社会で私たちがより幸せな生活を送るためにどうすれば良いのかを考える。

開講日時：8月23日（火）～10月11日（火）原則火・木曜日（全15回）
午後6時～7時30分

会場：名古屋大学シンポジオンホール

修了証書：10回以上の出席者に交付

募集定員：200名

受講料：9,200円

申込期間：7月1日（金）～8月19日（金）

後援：愛知県教育委員会・名古屋市教育委員会

問合せ先：研究協力・国際部社会連携課 TEL 052-788-6144



回	小 テ ー マ	所属・職名	担当講師名
1	脳卒中を中心とした医療情報ネットワークの構築	大学院医学系研究科教授	吉田 純
2	情報と医療 - 画像処理の医療への応用 -	大学院情報科学研究科助教授	森 健策
3	コンピュータのしくみ	大学院工学研究科教授	安藤 秀樹
4	情報伝達の数理 - より正確に、より安全に、より効率よく -	大学院多元数理科学研究科講師	久保 仁
5	情報と報道記者	大学院国際言語文化研究科教授	吉田 正也
6	高度情報社会と法の役割	大学院法学研究科教授	愛敬 浩二
7	情報と経済 - ITは日本経済を救うか？ -	大学院経済学研究科教授	根本 二郎
8	人の国際移動と情報	大学院国際開発研究科助教授	イゴリ サヴェリエフ Igor SAVELIEV
9	情報の宝庫としての文庫 - 尾張名古屋の歴史的な文庫をたずねて -	大学院文学研究科教授	阿部 泰郎
10	情報を喰う脳 - 神経経済学の話から -	大学院生命農学研究科助教授	松島 俊也
11	遺伝情報 - 親から子に受けつがれるもの -	遺伝子実験施設教授	杉田 護
12	身体運動と情報 - 動きのしくみとその獲得 -	総合保健体育科学センター教授	山本 裕二
13	学校教育における情報の認知と創造	大学院教育発達科学研究科助教授	藤村 宣之
14	アートのアンリアル - もうひとつの情報科学 -	大学院情報科学研究科助教授	茂登山清文
15	岩石に記録された情報 - 地球環境の変遷 -	大学院環境学研究科教授	榎並 正樹

■ラジオ放送公開講座「名大リレーセミナー」

テーマ：安全・安心な社会をめざして

放送日時：7月3日～9月4日の毎週日曜日（10回）午前7時30分～8時

放送局：東海ラジオ（1332kHz）

問合せ先：研究協力・国際部社会連携課 TEL 052-788-6144

回	小 テ ー マ	所属・職名	担当講師名
1	食の健康・安心	大学院生命農学研究科教授	大沢 俊彦
2	安心・安全な道路交通社会を目指して	大学院環境学研究科教授	森川 高行
3	犯罪被害者の心のケア	大学院教育発達科学研究科教授	蔭山 英順
4	社会の中の安全－消費者被害、少年犯罪から自分を守るために－	大学院法学研究科教授	加藤 雅信
5	安心できる金融システムをつくるために	大学院経済学研究科教授	家森 信善
6	健康で安心な社会	総合保健体育科学センター教授	押田 芳治
7	医療の安全性	医学部附属病院助教授	鳥居 啓三
8	来るべき大地震に備えて	大学院環境学研究科教授	鈴木 康弘
9	環境汚染－安全のベースライン	大学院環境学研究科教授	田中 剛
10	平和－国際関係、戦争とテロ	大学院国際開発研究科教授	中西 久枝

■部局企画

講座等名	内 容	開講日時	会 場	対象・定員	参加費	問合せ先
大規模コーパスと英語研究 －テキスト処理ツールを使ってコーパスの中身を見る－	テキスト・エディターや表計算ソフト、UNIXのツールやPerlを使って、情報抽出過程を段階ごとに確認しながらコーパス検索することの重要性を考える。	7/30～8/2 (4日間集中) 9時～16時	大学院国際開発研究科棟	学部学生・大学院学生・研究者・教師 40名 申込終了	9,200円	大学院国際開発研究科 TEL 052-789-4952
国際教育開発論	本学の教員を含む『国際教育開発論』の執筆者が、自ら取り組んできた「開発と教育」にかかわる方法論と研究手法、教育段階別の課題・イシューについて講義を行う。	10/7～1/27 金曜日 18時～20時	学内	市民一般 70名 事前申込必要	10,200円	大学院国際開発研究科 TEL 052-789-4952
日本像を探る －外から見た日本・内から見た日本－	わたしたちの抱く「日本像」とは、どのように形成されたもので、それは外国人の抱く日本像とどのように異なり、関係しているのか。文化史の様々な断面を様々な視点から考える。	6/3～7/22 18時30分～20時	文系総合館カンファレンスホール	学部学生、大学院学生、市民一般 60名 申込終了	7,200円	大学院国際言語文化研究科 TEL 052-789-5245
健康開発のための運動基礎理論	運動指導のための基礎理論について学び、より効果的な健康増進プログラムの企画・運営や実践指導に役立てよう。	7/9～7/10 9時～17時	医学部保健学科(大幸地区)	健康増進指導を専門的に行っている者 30名 申込終了	6,200円	総合保健体育科学センター TEL 052-789-3946

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

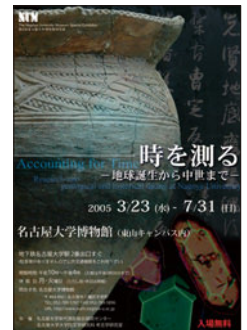
3月23日(水)～7月31日(日)

場 所：博物館
開館時間：10時～16時
休 館 日：月・火曜日
ただし祝休日は開館
入 場 料：無料

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

第8回名古屋大学博物館特別展

テ ー マ：時を測る—地球誕生から中世まで—



7月19日(火)

場 所：環境総合館レクチャーホール
時 間：17時30分～19時

[問い合わせ先]
災害対策室 052-788-6038

第11回名古屋大学防災アカデミー

講 師：藤井直之環境学研究科教授
演 題：成熟した自然災害観をはぐくむ：火山文化の視点から

7月19日(火)

場 所：教育学部大会議室（1階）
時 間：13時～14時30分

[問い合わせ先]
近藤孝弘教育発達科学研究科助教授
052-789-2619

大学院教育発達科学研究科・高等教育研究センター共催講演会

講 演 者：カール・ハインツ・グルーバー氏（ウィーン大学教授）
演 題：最近のオーストリア高等教育改革をめぐって
使用言語：英語（通訳なし）

7月21日(木)

場 所：博物館講義室
時 間：15時～

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

第42回名古屋大学博物館特別講演会

講 師：鈴木和博年代測定総合研究センター長
演 題：名古屋大学で開発した CHIME 年代測定法

7月26日(火)

場 所：高等総合研究館カンファレンスホール
時 間：17時～

[問い合わせ先]
研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛
052-788-6051

第10回高等研究院セミナー

講演者Ⅰ：鮎京正訓法政国際教育協力研究センター教授（高等研究院流動教員）
「アジア諸国に対する法整備支援」
講演者Ⅱ：松原隆彦理学研究科助教授（高等研究院流動教員）
「宇宙の構造から宇宙の起源を探る」



7月29日(金)～8月8日(月)

主 催：AC21、名古屋大学

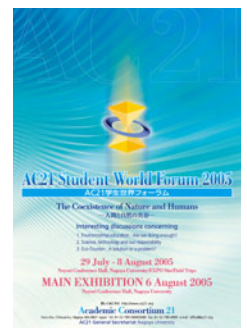
[問い合わせ先]
AC21推進室
052-789-5684
052-788-6122

第1回 AC21学生世界フォーラム2005

メインテーマ：The Coexistence of Nature and Humans（人間と自然の共存）

- 目 的：a. 経験の共有や意見交換を通じて、学生の国際的な問題についての理解を深める
b. 議論されたトピックに関連する新しいアイデア及びイニシアティブを促進する
c. 学生が互いの友情を深めて偏見障壁を克服するような新しい関係を構築する機会を提供する
d. グローバルに物事を考え、行動する「きっかけ」を提供する
e. AC21ネットワークの強化

形 式：ワークショップ、講演会、メインフォーラム、フィールドトリップ等
愛・地球博にあわせて開催し、AC21メンバー機関の学生代表各1名ずつが参加する



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

7月31日(日)

場 所：名古屋市科学館 生命館 B2階
サイエンスホール

時 間：13時～17時

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

21世紀 COE 地球支援室
052-788-6042・6043

名古屋大学万博記念国際フォーラム サテライトシンポジウム
「氷河期から地球温暖化、そして未来は—アジアの環境
変化と人類の活動を考えよう—」

共 催：名古屋市科学館、名古屋大学21世紀 COE プログラム「太陽・地球・
生命圏相互作用系の変動学」

プログラム

- ・マンモス化石試料から読み取るマンモスの起原・進化・絶滅～古環境変遷ならびに人類活動との関わり
小澤智生環境学研究科教授
- ・気候変動～氷河期から地球温暖化時代まで～
北川浩之環境学研究科助教授
- ・アジアモンスーンと日本の気候～過去・現在・未来～
安成哲三地球水循環研究センター教授
- ・海面上昇とそのアジア沿岸域への影響
海津正倫環境学研究科教授



8月3日(水)

場 所：メルパルク横浜(郵便貯金会館)

時 間：13時～16時30分

[問い合わせ先]

学務部入試課 052-789-5765

大学説明会 (関東地区)

8月5日(金)・8月6日(土)

場 所：IB 電子情報館
時 間：13時10分～19時30分(8月5日)
9時30分～17時(8月6日)

[問い合わせ先]

シンポジウム NGMP2005事務局
(Nature COE)
052-789-3589

名古屋大学万博記念国際フォーラム サテライトシンポジウム
21世紀 COE シンポジウム「自然の叡智に学ぶ “ものづくり”」

主 催：名古屋大学21世紀 COE プログラム「自然に学ぶ材料プロセッシングの創成」

http://www.nature.coe.nagoya-u.ac.jp/home_j.html



8月6日(土)～10月7日(金)

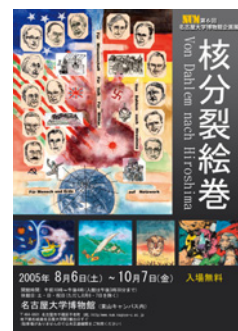
場 所：博物館
開館時間：10時～16時
休 館 日：8月6日・8月7日を除く
土・日曜日・祝休日
入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

第6回名古屋大学博物館企画展

テ ー マ：核分裂絵巻



8月6日(土)

場 所：野依記念学術交流館カンファレンスホール

時 間：9時30分～17時30分

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

林良嗣環境学研究科教授
052-789-2772・2773

名古屋大学万博記念国際フォーラム サテライトシンポジウム
「私たちは人間生活と環境の未来を構想できるのか？」

主 催：大学院環境学研究科

共 催：(財)UFJ 環境財団、中日新聞社

後 援：愛知県、名古屋市、愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会

使用言語：日本語・英語 (同時通訳付き)



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

8月7日(日)

場 所：豊田講堂
時 間：9時30分～20時30分

[問い合わせ先]
万博記念国際フォーラム事務局
(エコトピア科学研究所事務室内)
052-789-5263

万博記念国際フォーラム (IFSS-Nagoya 05)

主 催：万博記念国際フォーラム組織委員会 (名古屋大学、2005年日本博覧会協会、愛知県、名古屋市、名古屋商工会議所、(社)中部経済連合会、(財)科学技術交流財団、(財)名古屋都市産業振興公社、(財)名古屋産業科学研究所)

プログラム

- 開会の挨拶
平野真一 (万博記念国際フォーラム組織委員長・名古屋大学総長)
- 来賓の挨拶
豊田章一郎 (日本国際博覧会協会会長)
- 第Ⅰ部 講演：持続可能社会へのいざない
- 第Ⅱ部 講演：循環型社会へのみちのり
- 第Ⅲ部 パネル討論：持続可能な循環型社会
- 第Ⅳ部 フォーラムの夕べ (懇親会)



8月8日(月)・8月9日(火)

場 所：IB 電子情報館

[問い合わせ先]
北川邦行エコトピア科学研究所教授
FAX 052-789-3910

**名古屋大学万博記念国際フォーラム サテライトシンポジウム
エコトピア科学に関する国際シンポジウム2005**

主 催：エコトピア科学研究所
内 容：高温エネルギー変換研究センター主催の「先端のエネルギー変換および関連技術に関する国際シンポジウム」(RAN95, RAN98, RAN2001)をエネルギー・セッションに組み込み、さらにナノマテリアル・セッションと環境/リサイクル・セッションを設けます。同シンポジウムでは、一般及びポスターセッションに加え、9つのオーガナイズド・セッションにおいて、世界的に著名な科学者、技術者による招待講演を行い、ナノマテリアル、環境/リサイクル・システム及びエネルギーの分野における最新の研究に関する討論、情報交換の場を提供します。

http://www.esi.nagoya-u.ac.jp/h/isets05/index_japanese.html



8月9日(火)～8月11日(木)

場 所：豊田講堂・各学部
時 間：各日とも10時～16時

[問い合わせ先]
学務部入試課 052-789-5765

大学説明会 (東山キャンパス)

- 日 程：9日 文系学部
- 10日 理系学部
- 11日 情報文化学部・工学部

8月14日(日)

場 所：IB 電子情報館
(他に三重・大阪でも実施)
時 間：10時～16時30分
参加資格：高校生、ジュニアは中学生が対象
(小学生は5年生以上)
参 加 料：1,000円
申込方法：ハガキによる申込

[問い合わせ先]
研究協力・国際部社会連携課
052-788-6144

第16回数学コンクール・第9回ジュニア数学コンクール

第6回数学コンクール論文賞
応募要項に出題する問題に対し、論文(個人又は共著)を受け付ける(8月末日)

※終了後に採点を行い、各コンクールの優秀者には11月3日(祝)の表彰式において賞状及び記念品を贈呈する



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

8月22日(月)

場 所：新大阪シティプラザ
時 間：13時～16時30分

大学説明会（近畿地区）

[問い合わせ先]

学務部入試課 052-789-5765

8月25日(木)・26日(金)

場 所：野依記念学術交流館

名古屋大学電子図書館国際会議（IADLC : The International Advanced Digital Library Conference in Nagoya）

[問い合わせ先]

附属図書館情報管理課庶務掛
052-789-3667

内 容：基調講演、講演・討論、ブース展示等

9月27日(火)

場 所：高等総合研究館カンファレンスホール
時 間：17時～

第11回高等研究院セミナー

講演者Ⅰ：芝井 広理学研究科教授（高等研究院流動教員）

「遠赤外線で迫る宇宙諸天体の誕生現象」（仮題）

講演者Ⅱ：八島栄次工学研究科教授（高等研究院流動教員）

「超構造らせん」（仮題）

[問い合わせ先]

研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛
052-788-6051

名大トピックス No.146 平成17年7月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報委員会

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL. 052-789-2016 FAX. 052-789-2019 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

豊田講堂前庭で行われた名大祭の最後を飾る「盛夜祭～新たなるミチへ」の様子



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

39 名大初の女性博士

2003（平成15）年度の名大における博士号取得者は557人にのぼります。そのうち、約4分の1にあたる148人が女性であり、すでに女性の博士は珍しい存在ではなくなってきています。

しかし、女性が大学教育から疎外されていた戦前において、女性の博士号取得はきわめて稀であり、それだけで大きなニュースになるほどだったのです。

名大初の女性博士は、早くも名古屋帝国大学（名帝大）が創設された1939（昭和14）年に見ることができます。湯本（旧姓中尾）アサ（1902-1979）という女性でした。

1902（明治35）年、神奈川県箱根に生れた中尾アサは、父親を早く亡くして貧しいなか、母と兄に支えられながら、その抜群の成績により奨学金などを受け、横浜英和女学校から東京女子医学専門学校（現東京女子医科大学）に進みました。同校を首席で卒業したアサは、卒業生で初めて海

外に留学し、アメリカのミシガン大学から公衆衛生学の学位を授与されています。

再度の留学先であるドイツでエリート官僚の湯本昇と結婚したアサは、1935年、夫の赴任先である名古屋に同行します。そこで金城女子専門学校（現金城学院大学）の講師をしながら、名古屋医科大学専攻科で研究を続け、同大学が名帝大となるのとはほぼ同時に、37歳で博士の学位を得たのです。博士論文の題目は、「女子の身体発育におよぼす職業の影響」でした。

その後、戦争による混乱や夫の病気などで研究を断念せざるをえなかったアサですが、戦後は教育家としても活躍することになりました。群馬県の教育委員を8年も務めたのち、1956年に母校成美学園（元横浜英和女学校、現横浜英和学院）の学園長に就任し、以後16年にわたり、同学園の発展に大きな足跡を残しました。



職場の彼女を代辯

湯本さん 名大初の女医博

陣中論文では宇佐美中佐



上ひこれと題するため女学生をもとり上げて研究をなしたもので、

既婚者の観察では、主婦は体格体力ともに良好、市の発育もよく、

廣田、女店さんは身長が高いはゆる業入、女学生は、

をり、女工は何れも、バス車掌は市育が良好であるが、

一年後、女店、女工、女学生、又車掌が良好となつてをり女学生もあまり良好ではない、

注目すべきは女店員、女学生の下長身の育が大きい、筋力は着

護衛隊長、紡績女工、バス車掌となつてゐるが要するに

身体を動かすことの多い

作業者は市の発育が良好で、

發育不良、立業は身長發育が

く、バス車掌は作業過度とみ

れるとあり

産業衛生學上、婦科の論文とい

べきである、なほ、

による、

院」で新博となつた宇佐美正

夫氏は愛知大出身の海軍軍醫少

佐で、

つてきたものである、新博は次

の通り

毛受英次（名古屋中門前町八ノ七）△宇佐美正夫（名古屋中區東洲町二〇）△湯本アサ（神奈川縣三浦郡栗野町新田二二八）△今村勉（名古屋昭和山町四ノ二）△伊藤鶴（名古屋東區清水町出見）△和歌山縣妙寺町居住△宇野誠夫（名古屋千種區藤田町二ノ三）△藤原廣甲府市元柳町

1 | 3

2 |

- 1 湯本アサ（成美学園時代、『湯本アサ先生の思い出』より）
- 2 米国公衆衛生協会欧州視察団（1930年）に加わったアサ（一列目中央、『湯本アサ先生の思い出』より）
- 3 当時の新聞記事（『名古屋新聞』1939年8月2日朝刊）